

## 「主を恐れることを学ぶ」

北大阪教会 山本敬夫



民をわたしのもとに集めよ。わたしは彼らにわたしの言葉を聞かせ、地上に生きながらえる間、彼らにわたしを恐れることを学ばせ、またその子供を教えることができるようにさせよう。

申命記 4・10

冒頭で紹介した聖句は、イスラエルがカナン入国前に、異教の土地で生活するための心構えを教えられている箇所です。ここで、「彼らにわたしの言葉を聞かせ」と言われています。これは、主が与えられた律法を教えることです。

主がここでイスラエルに命じられたことは、家庭や地域における宗教教育です。そして、その目的は「主を恐れることを学ぶ」ことです。主は、異教の習慣が根深い地でイスラエルが正しく生活をするためには、「主を恐れることを学ぶ」ことが必要だと教えておられるのです。

この日本も同じような異教の地です。子どもたちをとりまく環境は、主から離れさせるものにあふれています。塾やクラブ活動、ゲームや友だち

と遊ぶこと、テレビの影響など。この国で信仰生活を送るためには、まず、主を恐れることを学ぶ必要があります。

この命令を祭司と長老たちが民に読み聞かせたことから（申命記31・9）、まず牧師と教会役員と教会学校教師が主を恐れることを学ばなければいけないことがわかります。そしてクリスチャンの親が主を恐れることを学ぶことです。

主を恐れるとは、神を神と認めて敬い愛することです。そうなるためには、本当の神がどのような方を聖書から教えられ、主がどれほど私たちを愛しておられるのか、十字架の愛と恵みを知ることが大切です（ルカ7・41〜47）。

さらに、主を恐れることは、神を第一として生きることです。ですから、み言葉を守るように教え、励ますことです。このために、分級の目標を聖書理解を深めることから、主を恐れることを学ぶことに変えてはいかがでしょうか。また、子どもたちが自分の言葉で祈るなら、主が生きておられることを体験することができます。主が「…生きることで、…自分のものとすることができるように」（申命記4・1）と約束されているとおりです。主を恐れることを学ぶことが、教会学校のなすべき大切な働きなのです。

# 牧羊者

## 目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「聖書の歴史的背景」	4
旧約⑧「サムエルと王たち」	15
キリストの十字架への道	45
牧羊ひろば（枚方希望教会）	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

### 〔凡例〕

- 1、原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
- 2、礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について  
「ホーリネス・」〔ホ・〕……日本ホーリネス教会  
「インマヌエル・」〔イン・〕……インマヌエル教会学校部  
「日キ・」……日本キリスト教団出版局

●キリストの恵みに応えて

マタイ 21・3

●旧約⑧ 「サムエルと王たち」

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
1月6日 新年礼拝	神のみわざの始まり	サムエル上 1・1～20	ヘブル 10
13日	神の御声を聞く	サムエル上 3・1～14	同上 9
20日	心を見られる神	サムエル上 16・6～13	同上 7
27日	大きな困難に立ち向かう	サムエル上 17・31～49	同上 47
2月3日	知恵を求める	列王上 3・3～28	同上 9

●キリストの十字架への道

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
2月10日	神に喜ばれる 献げ物	ルカ 21・1～4	同上 3
17日	主の晩餐の恵み	ルカ 22・14～23	同上 19
24日	十字架に向かう 祈り	ルカ 22・39～46	同上 42
3月3日	キリストの まなざし	ルカ 22・54 31～38 62 34	同上 61
10日	身代わりの 十字架	ルカ 23・13～25	エペソ 2・21
17日	十字架上での 祈り	ルカ 23・32～38	同上 34
24日 棕櫚の日	十字架による 救い	ルカ 23・39～43	同上 43
31日 イースター	霊の目を開かれて	ルカ 24・13～32	同上 31

# 「聖書の歴史的背景」

—CS教師として、知っておきたい基礎知識—

堺栄光教会 長田 栄一



「聖書の歴史的背景」などと言われると、「難しそうだな」と思われるかもしれません。しかし、CS教師として、毎週のクラスを準備する中で、いろいろな疑問が浮かぶと思います。「この書が書かれたのは、いつ頃なのだろう」、「ダビデって、いつ頃の時代の人のだろう」、「イスラエルが南北に分かれていたのはいつ頃?」、「イエス様のお働きはどれくらいの期間だったの?」、「パウロやヨハネの手紙はいつ頃、どんな背景で書かれたの?」などなど…。

これらの疑問を解くためには、色々な本を調べる必要があります。ごく簡単に答えが分かるものもあれば、簡単には「正解」が出てこないものもあるでしょう。ただ、日頃から、聖書の歴史的背景についての基本を押さえて

おけば、これらの疑問の多くに対して「とりあえず」の答えを出すことはできます。

「とりあえず」では満足できない、厳密な議論をしたという方は、各方面の専門書を読んで頂くしかありません。このような問題のために、専門的に研究を続けておられる方々もあるのですから、奥の深い分野であるのも事実です。しかし、CS教師としてご奉仕を続けて頂く上で、「これ位は押さえておいて頂きたいポイント」があるのも事実です。特に、今回は、大ざっぱにはあっても、聖書全体を歴史的に正しく位置づけることを目標としながら、基本的部分に絞ってまとめてみました。ご参考になさってください。

## ◎旧約聖書の歴史的背景

まずは、旧約聖書の歴史的背景からです。ここでは、旧約聖書三九巻を大きく三つに分けて説明したいと思います。後ろに、「旧約聖書・歴史年表」を載せています。これを参考にしながら読まれると、分かりやすいと思います。

### 一、律法と歴史書

旧約聖書三九巻は、現行の日本語訳聖書の順序に従って、一般に四つに分けられます。第一は、「律法」で、創世記から申命記の五つの書。モーセが書いたと言われるので、モーセ五書とも呼ばれます。第二は、「歴史書」で、ヨシヤア記からエステル記まで。第三は、「詩歌」と呼ばれ、ヨブ記から雅歌まで。第四は、「預言書」と呼ばれ、イザヤ書からマラキ書までです。

このうち、律法（モーセ五書）と歴史書は、天地創造のはじめから、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフと

いった族長たち、続くイスラエル民族の歴史を扱っています。ですから、旧約聖書が扱う歴史を理解しようとするなら、律法と歴史書を読めば、その全体的流れを把握することができることになります。

#### （一）律法・歴史書各巻が扱う歴史

以下、律法、歴史書の各巻が扱う歴史の範囲について、大ざっぱにご説明したいと思います。扱っている歴史の内容によって、便宜上、七つのグループに分けていますが、同じグループだからと言って、同じ著者であるというわけではありません。あくまでも扱っている歴史の内容による、便宜上のグループ分けとしてご理解ください。

##### ①創世記

天地創造以下、人類のはじめの歴史が記されますが、12章以下は、特にアブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフといった、いわゆる族長たちの物語です。

##### ②出エジプト記・レビ記・民数記・申命記

これら四つの書は、ヤコブの子孫がエジプトの地でイスラエルという一民族として大きくなった後、モーセに

率いられ、エジプトを出てから、約束の地カナンを目前にするところまでの歴史を扱います。

### ③ヨシユア記

モーセの後継者ヨシユアの指導のもと、カナンの地に入り込んだ歴史を扱います。

### ④士師記・ルツ記

士師記は、ヨシユア亡き後、十二部族が周辺諸国の圧迫を受けつつ、士師と呼ばれるリーダーたちによって導かれ、助けられる歴史を扱います。ルツ記は、士師の時代の後期、ルツというモアブ人女性が、ボアズ（後にダビデの先祖となる人物）と結婚するに至る経緯を扱います。

### ⑤サムエル記（上・下）・列王紀（上・下）

サムエル記は、イスラエル王国形成の歴史を扱います。上巻では、サウル王の死まで、下巻では、サウルの死後、ダビデを通して王国が築かれる歴史を扱います。列王紀は、その後のイスラエル王国の歴史です。ソロモンの息子の代で、王国が南北に分かれる経緯と共に、北イスラエル王国と南ユダ王国（ダビデの子孫が王となる）の歴史が交互に記されます。特に、北イスラエルを背景にし

たエリヤ（主に上巻）やエリシャ（下巻）の活躍も描かれます。

### ⑥歴代志（上・下）

歴代志は、創世記から列王紀までが扱う歴史を越え、バビロン捕囚期後までを扱っています。最初の九章は、系図で、そのような歴史全体をカバーしつつ、ポイントとなる部分に焦点を当てながら記されています。その後は、ダビデ王国の形成（上巻）、ソロモン王以下、南ユダ王国の歴史（下巻）が中心的に扱われています。

### ⑦エズラ記・ネヘミヤ記・エステル記

これら三つの書は、バビロン捕囚からのエルサレム帰還がなされた時期を扱います。エズラ記は、第一回の帰還民による神殿再建、その少し後代のエズラによる帰還民指導の様子が扱われます。ネヘミヤ記は、エズラとほぼ同時期の人物と考えられるネヘミヤによる城壁再建の様子を中心に扱います。エステル記は、エズラ記が扱う時期と重なりますが、ペルシャ王国を舞台として、イスラエル民族滅亡の危機が、一女性エステルを通して回避される経緯を扱います。

## (2) これらの歴史の流れ (まとめ)

さて、律法・歴史書の各巻が扱う歴史をもう一度振り返りながら、全体として大きな流れにまとめてみましょう。これらの歴史的区切りも、とりあえず聖書全体を整理して理解するための、便宜的なものとしてご理解ください。

### ① 天地創造から族長たちまで

創世記で扱われます。

### ② 民族形成時代

出エジプトによるイスラエル民族形成から王国形成の直前まで。出エジプト記以下のモーセ五書（四巻）と、ヨシュア記、士師記、ルツ記で扱われます。

### ③ 統一王国時代

サウル、ダビデ、ソロモンの統一王国時代は、サムエル記、及び列王紀の最初で扱われます。また、歴代志の上と下の一部でも扱われます。年代としては、サウル王による王国成立が紀元前一〇五〇年頃ですが、ダビデによる王国形成が紀元前一〇〇〇年頃と覚えるのが、覚えやすいでしょう。

### ④ 南北分裂時代

イスラエル王国が南北に分かれ、北イスラエル王国と南ユダ王国に分かれた南北分裂時代は、列王紀と歴代志下で扱われます。但し、歴代志が扱うのは、そのうち、南ユダ王国の歴史が中心です。年代としては、アッシリヤによる北イスラエル滅亡が紀元前七二二年頃、バビロンによるユダ王国滅亡紀元前五八六年頃と覚えておけば便利でしょう。以後、バビロンによる捕囚の時代を迎えます。

### ⑤ 捕囚からの帰還の時代（ペルシャ時代）

バビロン帝国を滅ぼしたペルシャ帝国の時代は、イスラエル民族にとっては、捕囚の民の一部がエルサレムに帰還した時代でもありました。この時期は、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記によって扱われます。

## 二、詩歌

律法、歴史書に続く、詩歌と呼ばれるグループは、ヨブ記、詩篇、箴言、伝道の書、雅歌で、いずれも文学的な要素の強い書です。内容的に、歴史を描くことを目的

とするわけではありませんし、書かれた歴史的背景も、様々です。詩篇にはダビデの作と思われる詩が多くありますが、他の時代の人々の詩もかなり含まれます。箴言、伝道の書、雅歌は、伝統的にソロモンが書いたと考えられてきましたが、各種異論も出されています。ヨブについては、実在の人物であるのは確かですが、どういう時代の人か、諸説あつて定まりません。エゼキエル書に登場するので、それ以前の人であるとしか分かりません（エゼキエル14・14）。

従つて、これらの書の理解のためには、歴史との関わりを断定的に考えるよりも、その内容自体を味わうことに集中したほうがよいかもしれません。

### 三、預言書

旧約聖書最後のグループ、預言書は、各時代の預言者の言葉をまとめたものです。ですから、それぞれの書をよく理解するためには、その時代の歴史的背景をよく理解することが大切です。

現在の聖書の順序では、最初に大預言書と呼ばれるイ

ザヤ書、エレミヤ書、哀歌、ダニエル書、エゼキエル書が置かれています。これは、歴史の順序ではなく、単に書の長さによつて最初にまとめられたに過ぎません。哀歌は伝統的にエレミヤの作と考えられたため、ここに置かれました。次の十二の小預言書も、歴史的顺序に並んでいるわけはありません。また、南北分裂王朝時代の預言書では、北イスラエルで活躍した預言者か、南ユダで活躍した預言者か、注意を要します。バビロンやペルシャによる捕囚時代では、預言者活動をバビロンやペルシャで行なつた預言者か、エルサレム周辺で行なつた預言者か、確認する必要があります。

次のページに掲載した「旧約聖書・歴史年表」は、これらの情報を一目で分かるようにまとめたものです。但し、年代については異論のあるものも沢山あります。伝統的、保守的理解による「とりあえず」のものとして、ご理解ください。

「とりあえず」ということで言えば、各預言者について細かい年代を覚えるよりも、北イスラエル滅亡以前か、それ以後、南ユダ滅亡までか、それとも捕囚期以後か、大ざっぱにでも覚えておくといひのではないのでしょうか。





## ◎新約聖書の歴史的背景

新約聖書の時代背景は、ほぼ紀元一二世紀に限られています。新約聖書も、大きく二つに分けて説明致します。

### 一、福音書、使徒行伝

四つの福音書は、いずれもキリストの生涯を記しています。また、使徒行伝は、キリストの復活、昇天後、弟子たちを通して地中海世界に福音が伝えられた様子が記されます。

旧約聖書に関わる歴史の流れを把握するためには、モーセ五書と歴史書を読めばよいように、新約聖書に関わる歴史の流れを把握するためには、福音書と使徒行伝を読めばよいことになります。

これらの書に記される出来事を、歴史的に整理する上で、いくつかの年代を頭に入れておくとうまいでしょう。

「とりあえず」、以下のようなポイントを押さえておけばよいのではないでしょうか。

#### ①キリストの誕生

ご承知のように、キリスト誕生を紀元元年として作られたはずの西暦は、その後の研究によつて、実際とは食い違いがあると考えられるようになりました。実際の誕生は、諸種の材料により、紀元前7〜4年頃ではないかと言われています。

#### ②キリストの伝道開始

イエス様が宣教を開始されたのは、ルカ3・23により、「年およそ三十歳の時」です。また、バプテスマのヨハネの伝道開始が「皇帝テベリオ在位の第十五年」であったというルカ3・1〜2の記述より、（その解釈によつて年代に幅が出ますが、）紀元26〜29年と考えられます。

#### ③キリストの伝道期間

イエス様の宣教活動の期間については、およそ三年半と言われます。これは、四つの福音書を照らし合わせて考えると、イエス様の宣教活動中に、四回、過ぎ越しの祭りを迎えていることになるからです。

#### ④キリストの死、復活、昇天

以上、②と③を合わせますと、イエス様の十字架上で死、復活、昇天は、紀元30〜33年頃ということになり

ます。「とりあえず」ということでは、紀元30年頃と覚えておけばよいかもしれません。

⑤初代教会誕生→ステパノ殉教、パウロの回心以降は、使徒行伝によって知られる初代教会の歩みになります。

まずは、ペンテコステの日の聖霊降臨による初代教会誕生、ステパノの殉教と共に起こったクリスチャンの離散、パウロの回心といった出来事が記されます。これらの出来事は、「とりあえず」ということでは、紀元30年代と覚えておけばよいでしょう。

⑥パウロの伝道旅行  
続いて、パウロは、地中海世界一帯で三回の伝道旅行を行いました。

第一回 小アジア(使徒13・1～14・28)

第二回 小アジア→ギリシヤ(マケドニア、アカヤ)  
(使徒15・36～18・22)

第三回 小アジア→ギリシヤ(マケドニア、アカヤ)  
(使徒18・23～21・17)

これらの年代も、「とりあえず」ということでは、紀元40～50年代と覚えておけばよいでしょう。

新約聖書・歴史年表					
BC4	AD30	AD40	AD50	AD60	AD100
福音書が描く年代		使徒行伝が描く年代			
主な出来事	キリスト誕生	キリスト死・復活	パウロ伝道旅行	パウロ死 パウロローマ幽閉	
各巻が書かれた年代		① I・IIテサロニケ	② I・IIコリント	③ ローマ 獄中書簡 牧会書簡 I・IIペテロ	黙示録 I・II・IIIヨハネ

注) この年表は、『新聖書辞典』(いのちのことば社)等を参考に、長田が作成したものです。下の出来事等は、上の年号との位置関係により、およその年代を把握できるようにしていますが、厳密なものではありません。「パウロ伝道旅行」部分、「各巻が書かれた年代」では、第1回～第3回伝道旅行まで、拡大表示しています。

## ⑦パウロのローマ幽閉、死

使徒行伝の終りは、パウロのローマ幽閉で閉じられます。伝説によれば、この後パウロは一旦釈放され、スペインにまで伝道に出かけたと言います。その後再び、捕えられ、ネロ帝の迫害のもとで殉教したと言われます。ネロ帝の統治が紀元68年までなので、それまでの出来事になります。が、「とりあえず」ということでは、紀元60年代と覚えておけばいいでしょうか。

## 二、手紙、黙示録

福音書と使徒行伝に、手紙と黙示録が続いています。パウロの手紙が十三、著者不明のヘブル人への手紙、ヤコブの手紙が一、ペテロの手紙が二、ヨハネの手紙が三、ユダの手紙が一、そして、ヨハネの黙示録という内訳です。

これらの手紙や黙示録を理解するためには、その手紙が書かれた執筆事情や執筆年代を考慮する必要があります。著者ごとに、そのあらましをご紹介します。

## ①パウロ

パウロの生涯については、「福音書、使徒行伝」とところで、あらましを紹介していますので、そちらを参照してください（⑤く⑦）。そのようなパウロの生涯の頭に置きながら、各手紙がパウロの生涯のどの時期に書かれたものかを考えることになります。

たとえば、『ローマ人への手紙』は、第三回伝道旅行中でのコリント滞在中に書かれたと考えられます（ローマ16・23、Iコリント1・14等）。

また、『コリント人への第一の手紙』は、第三回伝道旅行でのエペソ滞在時に（Iコリント16・8等）、『同第二の手紙』は、同じ第三回伝道旅行でのマケドニア滞在中に書かれたと考えられます（IIコリント7・5等）。

『ガラテヤ人への手紙』は、『ガラテヤの諸教会』（ガラテヤ1・2）をどう理解するかによつて、大きく二つの見解があります。詳細は省略しますが、「北ガラテヤ説」と呼ばれる見解では、第三回伝道旅行の途中、エペソで、一方の『南ガラテヤ説』によれば、第一回伝道旅行を終えて、アンテオケに戻ったとき、あるいは、第二回伝道旅行の途中、コリントで、といった説が提案され

ています。

『テサロニケ人への第一の手紙』は、第二次伝道旅行で、パウロがテサロニケの人々に伝道した後（使徒17・1〜3）、アテネ（1テサロニケ3・1）よりはむしろコリントで（使徒18・5、1テサロニケ3・6）書かれたと考えられています。『テサロニケ人への第二の手紙』も、同じコリントで書かれたと考えられています。

一般に獄中書簡と言われる『エペソ人への手紙』、『ピリピ人への手紙』、『コロサイ人への手紙』、及び『ピレモンへの手紙』は、伝統的には、ローマ幽閉時（紀元60年代はじめの約二年間）に書かれたと言われます。

また、一般に牧会書簡と言われる『テモテへの第一の手紙』、『テモテへの第二の手紙』、『テトスへの手紙』は、ローマ幽閉から一時釈放された後、再び捕えられ、殉教の死を遂げるまでの間に書かれたと考えられます。

もちろん、これらの見解以外にも、各手紙の執筆年代については、多くの説が出されており、中には、「有力」と言われるような説もあるのですが、「とりあえず」ということでは、これ位の理解で十分かと思えます。

## ②ヘブル人への手紙

歴史的には、パウロを著者と考える人々もいましたが、それを否定する人々も昔から多くいました。ヘブル2・3からは、使徒たちから教えを受けた第二世代の人々のだれかと考えるのがよさそうです。ほぼ確実に言えることは、紀元95年までに書かれたことだけであり（その時点でのローマのクレメンスによる引用があるので）、紀元一世紀後半に書かれたであろうとしか言えません。

## ③ヤコブ

『ヤコブの手紙』の著者ヤコブは、「主の兄弟ヤコブ」と考えられています。彼は、紀元62年殉教したので、それまでに書かれたとしか分かりません。

## ④ペテロ

著者、使徒ペテロは、紀元64〜68年のネロ帝迫害の中で殉教したと伝えられます。ペテロがローマ（1ペテロ5・13で「バビロン」と呼ばれている）で書いたとすると、紀元60年代で、パウロがローマにいなかった時期に、二つの手紙とも書かれたではないかと推測されます。

## ⑤ヨハネ

使徒ヨハネは、非常に高齢までエペソに住み、エペソ

で死んだと伝えられます。トラヤヌス帝の治世（紀元98～117年）まで生きていたとする伝承もあり、ほぼ1世紀の終りまで生きていたと考えられます。

ヨハネが福音書を書いた年代は不明ですが、一般的には四福音書の中でも最後に書かれ、ヨハネが比較的晩年に書いたのではないかと考えられます。

また、三つの手紙についても、確定的なことは言えませんが、福音書より後、紀元90年頃書かれたのではないかとする意見が一般的です。

黙示録については、「ドミティアヌス帝の治世の終り」に書かれたとする証言もあり、紀元96年頃、パトモス島（黙示録1・9）にいる時に書かれたとするのが一般的です。

#### ⑥ユダ

『ユダの手紙』は、「主の兄弟ユダ」が書いたと考えられます。ペテロの第二の手紙とよく似た部分が沢山あるため、一般的にはユダがペテロの手紙を見ながら書いたのではないかと言われ、紀元60年代後半以降に書かれたと考えられます。

#### 主な参考文献

『新聖書辞典』（いのちのことば社）

『新聖書注解』（いのちのことば社）

フランシス・ブランケンベイカー『早わかり聖書ガイド

ブック』（いのちのことば社）

千代崎秀雄『聖書なるほど博物館』（講談社）

イ・エシル『おっ?! 聖書が読めてくる!』

(Duranno Japan)

エドワード・ヤング『旧約聖書緒論』（聖書図書刊行会）

エヴェレット・F・ハリソン『新約聖書緒論』

（聖書図書刊行会）

# 聖書 サムエル上1・1〜20 テーマ 神のみわざの始まり

## 序論

(福井文彦)

サムエルは、士師として最後の人物であり、また預言者としては最初の人物です。彼はモーセとダビデの間のイスラエルの歴史において最も偉大な人物と考えられています。そのサムエルの誕生に際しては、悪い時代に染まることのなかった母ハンナの神への絶対信頼と祈りがあったのです。

## 一、ハンナの苦しみ

エフライムの山地のラマタイム・ゾピムに住むエルカナには、ハンナとペニンナという二人の妻がありました。エルカナがどうして二人の妻を持つようになったのかは聖書に記されていません。最初の妻のハンナに子どもがなかったことが原因のようです。その結果、ハンナは非常に苦しみと悲しみを経験する日々となりました。

ペニンナは最初こそ第二夫人として控えていました。ところが、子どもを宿し授けられると、子どもがいないハンナを見下し、軽蔑し、優越感をもってハンナを苦しめ

るようになりました。

エルカナ一家は、悪い時代の潮流に流されず、毎年シロの聖所への巡礼を欠かさない敬虔な家族でした。そこで犠牲をささげた後、感謝と和解のいけにえを食べたのです。エルカナがいけにえを分けるのですが、その大部分がペニンナの側の家族に与えられました。というのは、ハンナには子どもがいらないので自らの分しか与えられなかったからです。その時は、ハンナにとって最も厳しい試練の時でした。というのは、ペニンナがこの機会を利用し、ハンナの弱みにつけ込んで悩ませ続け、神を恨ませようとさえしたからです。

## 二、ハンナの祈り

ハンナは余りの悲しみと苦しみのために〈泣いて食べることもしなかった〉のです。そのハンナに対してエルカナは〈わたしはあなたにとって十人の子どもよりもまさっているではないか〉と言って、愛と優しさをもって慰めました。しかし、それでもハンナのたましいに刻まれた大きな傷は、いやされることはありませんでした。

その時、ハンナは主に心を向け、〈主に祈って、はげしく泣いた〉のです。確かに主が胎を閉じられたことが、

悲しみと苦しみの始まりです。しかしハンナは、人間の力や知恵、経験でどうすることもできない状況に追い込まれた時、神とみ言葉に正面から向きあったのです。

ハンナには子どもがないことが苦しみでした。しかし、祈り求めているうちに、自分の求めが吟味され、子どもが与えられることの意味が変えられたのです。与えられた子どもは一生の間主に仕えるために主にささげる、というものでした。これはナジル人としての誓願です。

ハンナは心のうちで主に物を言い、祈りに祈り、祈り抜きました。ところが祭司エリはハンナの祈りを誤解します。彼女が酒に酔っていると思っただけです。そこで「いつまで酔っているのか。酔いをさまじなさい」と命じました。そこでハンナの控えめな説明を聞き、事情を知ったエリはハンナの願いが聞かれるようにと祝福を祈ったのです。

### 三、ハンナの純真な信仰

祈りに祈り、祈り抜いた結果、〈食事し、その顔は、もはや悲しげではなくなった〉のです。このことは彼女の純真な信仰をあかしし、またその重荷を主にゆだねたことのあかしです。ハンナは自分の願いが実現する前に

すでに子どもが与えられると確信し、信仰によって子どもをささげる決心をしたのです。

ハンナは祈りの中で条件をつけず明け渡しました。その結果、ハンナは、「…がありがたければ」から「…がなくても」の信仰に変えられたのです。すなわち、神への信仰、絶対信頼の信仰（ヘブル11・6）です。神はハンナの祈りと信仰を覚えて、顧み、男の子を与えられました。

ハンナはその子をサムエル（神の名・神に求めた者）と名づけました。ハンナは喜びのあまり、主に誓ったことを忘れるような不信仰な者ではありませんでした。祈りの中で誓った通り、乳離れした幼いサムエルを、主の宮に連れて行き、そこで一生神に仕える者として、ささげたのです。

### 結論

サムエルの母、ハンナは子どもが与えられないため、非常に苦しみと悲しみの中を通りました。しかし、そのような状況の中にあっても、神を信じ、祈り、神のみわざがなされました。私たちもハンナの信仰と祈りに倣う者となりましょう。



## 研究資料

(宮澤清志)

二〇一三年の最初の教会学校において聴かれるみ言葉として、この箇所はよく聞かなければならない箇所である。特に今週の目標である「苦しみの中にあつても神が働かれることを信じ、神に祈る者となる」ために、ハンナの祈りの姿勢を学びたい。

## テキスト

- 1 エフラ임 ももとは地域の名で「実り豊かな地」という意味を持っていたようである。ラマタイム・ゾビム この町の名はここにしか出てこない。またその位置も不明である。
- 2 ふたりの妻 当時は族長時代と同じく、一夫多妻という制度は何の問題もなく前提されていたし、律法もそれを認めていた(申命記21・15)。しかし、神の本来の御計画は、生涯を通じて一人の夫が一人の妻をもつことである(マタイ19・8〜9)と、イエスは言う。聖書において、このような重婚の場面では、それに伴う困難もあわせて描かれていることがしばしばである。ハンナ 「いつくしみ」という意味の名。
- 3 シロ 会見の幕屋があつた場所(ヨシユア18・1、士師18・31)。また3・3では、このころ契約の箱もこの地に移

されていた。年ごとに、…主に犠牲をささげるのを常としたエルカナ一家は、毎年シロの聖所への巡礼を欠かさない敬虔な一家であつたようである。ホフ2とピネハス 2・12以下参照。ここではその伏線。またエルカナの家庭とエリの家庭との比較をする上でも3節後半の黙想は欠かせない。万軍の主 旧約聖書では、ここで初めて用いられている、神を描く際の重要な表現。この句は様々に説明されてきた。「万軍」の主とは、大いなる創造神に属するものであり、太陽、月、星、また天使や人間をも支配する支配者である。この言葉は、神の権能と栄光を表す称号となつた。

4〜5 ただ一つの分け前 犠牲を献<sup>ささ</sup>げた後の家族の祝いにおいては、感謝のいけにえや和解のいけにえは食べる事ができた(レビ7・11〜18)。エルカナはこのいけにえをとりわけ、自らの家族に分け前として与えるのである。ペニンナとその子たちにも分け前として与えられる。しかし、ハンナには子がいないので自らの分しか与えられないのである。

古代イスラエルでは、子どものいない妻は何かの神の不興を買っていると考えられた(「アブラハムとサラ」、「ヤコブとその妻たち」、「ザカリヤとエリサベツ」の物語など参照)。

9 段落が変わっているのです、ここからの物語がサムエル誕生の前年のことであろうと考えることもできるが、前節からのつながりから考えて、7節後半からサムエル誕生の前年の出来事であるという見方もある。飲み食いした 4節以降の情景を参照。エリ 「神は高くあげられる」という意味の短縮名。シロの祭司。

11 誓いを立てて いわゆるナジル人としての誓願を指す。ナジル人については10/21のサムソンの物語の研究資料を参照していただきたい。

13 酔っているのだ 祭司エリがこのように思ったことの背景として、古代イスラエル人の祈りが、本来は神の前で叫び求める祈りであったこと（詩篇18・6、77・1など）が背景として考えられる。当時、黙祷は非常に珍しかったようである。実際、ハンナは悲しみのあまり声も出なかったのかもしれない。また当時、巡礼の祝宴で、このような酔態は珍しくなかったようである（イザヤ28・7、士師9・27など）。

15 主の前に心を注ぎだしていた この表現は、灌祭（注ぎのささげ物）に用いられる表現である（出エジプト29・40）。灌祭は、祭壇の上にささぐべきものとされており、ハンナはこの祈りの場を祈りの祭壇ととらえていたのかも知れない。

16 悪い女 多くの訳語がある言葉である。「よこしまな女」（新改訳）、「墮落した女」（新共同訳）、「ベリアル娘」（ベリアルとは、無価値、邪悪な、という意味の言葉であり、後に悪魔という意味に転化されている）など。

17 エリの祝福の宣言であり、またとりなしの祈りでもある。祝福には力があり、また有効なものであると信じられていた（創世記27）。

18 食事し 「ハンナは泣いて食べることもしなかった」（7）との対比に注目。外見的には彼女の状況は何ら変わってはいなかったが、今や彼女は喜びにあふれていた。主が彼女の祈りを聞いて下さったという確信と、祭司を通して与えられた主の祝福の結果であろう。

19 知り 知的に知るという意味ではなく、人格的に知るといふ、より深い意味を持つ。

20 サムエル 「その（神の）名はエル」という意味を持つ。すなわち彼の本性、その人格はエルであるということである。彼女が祈った神の力を指したものである。祈りを聞かれる神について彼女がなした証しであろう。

参考図書 ジョイス・G・ボールドウィン『ディンデル聖書注解 サムエル記』（いのちのことば社）他。

## 聖書

サムエル上・1-20

## タイトル

ハンナの祈り（新年礼拝）

## 暗唱聖句

ハンナは心に深く悲しみ、主に祈って、

はげしく泣いた。サムエル上・10

## 目標

苦しみの中にあっても神が働かれることを信じ、神に祈る者となる。

## 導入

（松浦みち子）

新しい年を迎えました。今年こそは〇〇しようと一人ひとり何かしら新しい決心をしていることでしょう。この一年、どんなことがあるでしょうか。楽しいことだけでなく、嫌なこと、悲しいこともあるかもしれません。どちらにしても、一日一日を大切に過ごしましょう。

さて、学校の中のいじめのニュースが続いています。誰にも話せないで苦しんでいる子がたくさんいることを耳にして心が痛みます。でもどんなことがあっても死んじゃあダメです！どのような解決が得られるか、聖書からヒントを得ることが出来ますよ。

## いじめにあって悲しむハンナ

イスラエルの国にエルカナという人が住んでいました。エ

ルカナにはハンナとペニンナという二人の妻がいました。ペニンナには、子どもがいましたが、ハンナにはいませんでした。さて、エルカナは毎年シロという町に家族そろって神様を礼拝しに行きました。その度に、ハンナはとてもつらい思いをしていました。なぜなら、礼拝が終わると家族そろって食事をするのです。年に一度の特別のご馳走です。子どもたちも大喜びでお父さんのエルカナが分けてくれるのを待っています。ところが、ハンナには、子どもがいませんから、分ける前が少しありません。そこでエルカナは寂しい思いをさせてはならないとハンナには二倍の分け前をくれるのです。それを見たペニンナは嫉妬（しと）してハンナをいじめ、「あなたは神様に愛されてないから、赤ちゃんが生まれないんだわ」とか、いろいろの嫌味を言っていじめるのです。夫のエルカナは慰めてくれるのですが、ハンナは悩み苦しんで食事ものどを通りません。その時です。ハンナはすっと立ち上がり神殿に行きました。

## 祈るハンナ

どうすることもできない苦しい胸の内を打ち明けよう思ったのです。「神様だけは、わたしのこの苦しみ、悩みを知って助けてくださるわ」そう信じていました。ハンナははげし

1月

## 6日 礼拝メッセージ例

く泣きながら「万軍の主よ！わたしの悩みを聞いてください」と心を注ぎだして祈りました。ハンナは、子どもが与えられないつらさやいじめにあっていることを包み隠さず言い表したのです。「神様、わたしに男の子を与えてください。そうして下さったら、その子を神様におささげします」との誓いもしました。ハンナは声も出さずに一生懸命祈っていたのでただ唇だけが動いていました。その様子を見ていた祭司エリは、ハンナが酔っぱらっているのだと勘違いし、「これ、いつまで酔っているのか」と叱りました。ハンナはびつくりして顔をあげ「いいえ、祭司様、わたしはお酒など飲んでいません。悲しくて苦しくてどうしようもないわたしの心を主の前に注ぎだして祈っていたのです」と言いました。エリは「そうでしたか。安心して行きなさい。神様があなたの願いを叶えて下さいますように」と、やさしく言いました。神様に何もかもお話したハンナは、すっかり安心して、もう顔は悲しげではありません。神様が祈りを聞いて下さったことを信じ、心は明るく晴れ晴れした気持ちになりました。そして食事もとれるようになり、帰って行きました。

### 喜びにあふれるハンナ

神様は祈りを聞いて下さり、それからまもなく男の子が生

まれました。ハンナはその子をサムエルと名付けました。これは「主に求める」という意味です。ハンナは喜びにあふれ、どんなに神様に感謝したことでしょう。そして、乳離れするまで祈りながら育て、やがてサムエルが3才ぐらいになると祭司のところに連れて行き「この子を神様におささげします」と誓いを果たしました。

あなたは今まで心が張裂けそうに悲しいこと、苦しいことを経験しましたか？そんな時どうしましたか？①泣く？②祈る？③不機嫌になる？④八つ当たりする？⑤イエス様のことを思う？…詩篇の詩人が次のような詩を残しています。これは、この人がいじめられ、追い詰められ、もう死ぬばかりの時に叫びの声をあげた祈りの詩です。

「御前にわたしの悩みを注ぎ出し 御前に

苦しみを訴えよう。」詩篇12・3（新共同訳）

さあ、あなたも神様の御前で自分のありのままの気持ちをさらけ出し、心を注ぎだして言い表しましょう。神様は必ず聞いて助け、生きる道を開いて下さるお方です。声をあげ、主に向かって祈りながら、新しい一年を過ごしましょう。

♪三つのやくそく♪

（ホ・こどもさんびか120）

# 聖書 サムエル上3・1～14

## テーマ 神の御声を聞く

### 序論

(福井文彦)

サムエルはモーセ以後に出た最初の大預言者であり最後の士師です。彼が仕えていた祭司エリは老齢のために指導力と霊的な鋭さを失い、彼に代わる後継者として、神の目はサムエルに向けられていました。そのため、神は経験もないサムエルに語られます。その結果、サムエルは「神を知り」、預言者としての一步を踏み出すのです。

### 一、神に仕えたサムエル

ハンナには子どもがなかったが、その信仰と切実な祈りによってサムエルが与えられました。彼女は主に誓ったように乳離れした幼いサムエルをシロの聖所、エリのもとに連れて来て主にささげたのです(1・26～28)。

それ以来、〈わらべサムエルは、エリの前で、主に仕えて〉いました。〈わらべ〉とありますが、必ずしも年齢的な「幼な子」ことではなく、歴史家ヨセフスは、サムエルは12歳を過ぎていたと言っています。ところがサ

ムエルが育ち仕えた時代、エリ家を中心とする荒れすさんだ状況で、人の目をくらませ、神への思いを失わせていました。すなわち、霊的に枯渇していたのです。そのことを、〈そのころ、主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった〉と述べています。

しかし、サムエルは夜、熟睡している時でも、間違いはしましたが、エリが呼んでいると思えば、直ぐ起きてエリの所に飛んで行きました。その姿からもわかるように、サムエルは熱心に喜びをもって神に仕えていたのです。このサムエルに神はお心をとめられたのです。

### 二、神の声を聞いたサムエル

〈神のともしびはまだ消えず〉とありますから、夜明け前の頃のことです。エリは〈目がかすんで、見ることでできなくなり、そのとき自分の部屋で寝ていた〉のです。そのためサムエルは、〈神の箱のある主の神殿に寝て〉いました。

すると、主は〈サムエルよ、サムエルよ〉と呼ばれたのです。彼はびっくりエリに呼ばれたのだと思い、〈はい、ここにおります〉と言って、起きてエリの所に走って行きました。そして、〈あなたがお呼びになりました。

わたしは、ここにおります」と告げたのです。ところがエリは「わたしは呼ばない。帰って寝なさい」と彼に答えました。そこでサムエルは帰って寝ます。このようなことが二度、三度続きました。

なぜサムエルは、直接主が彼に語りかけておられるのに気がつかなかったのでしょうか。それは「主を知らず」にいたからです。サムエルの知っていた神は、日常のしきたりによって礼拝される神、エリを通して知る神でした。つまり、「主を知る」と「主について知る」とことは別なことです。「主を知る」ということは、み言葉によって、人格的、主観的な関係により、個人的に深く知ることです。その意味でサムエルは主を知らなかったのです、何度もエリの所に行ったのです。

三度もサムエルがエリの所に来た時、老人のエリは、ようやく主がサムエルに語っておられるのだと悟りました。それで、再び呼ばれた時は、『しもべ聞きます。主よ、お話しください』と言いなさい」とサムエルに教えたのです。

四度目も主は以前と同じようにそばに立たれ、サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれました。サムエルはすぐ

に「しもべは聞きます。お話しください」と答えました。こうして、サムエルは生まれて初めて神の声を、神の声として聞きました。その内容は神の人、エリの家への恐ろしい預言、想像を超えた厳しい宣告でした（11～14）。エリの家<sup>とが</sup>の咎は、いけにえによっても、穀物のささげものによっても、いかなる犠牲によっても永遠に償うことができないものでした。

サムエルはのち、主の言葉によって現れた神を知っている者として、神の声を聞き、また神の言葉を語る預言者として、イスラエルの歴史の中で非常に大切な人物となっていたのです。

### 結論

私たちの信仰生涯の中で、「神の声を聞く」といほど大切なことはありません。神は今も、サムエルのように、神の声を聞こうとする心備えのある人を求めておられます。

神の声を聞き続けるためには、神との交わりを持つことが基本です。そして祈りの内に神の声を聞きましょう。聖書を読んで、黙想し神の声を聞きましょう。人の声ではなく神の声を聞いて、サムエルのように自分を神にささげて従いましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

今月のサムエルの物語の中心となる箇所であり、特に本日の暗唱聖句は、幼稚科だけでなく、すべての主の民が暗唱すべき言葉である。この箇所在先立ち、説教者はサムエル記1〜2章に目を通して準備に取りかかる必要がある。

## テキスト

1 わらべ 子(1・22)、幼な子(2・11)、などと同じ言葉。しかし、必ずしも年齢的な「幼な子」と考える必要はない。この言葉はいわゆる「若者」というニュアンスも持つており、どちらかといえば「未熟さ」を表す言葉であろう。なお、ヨセフオスという歴史家は、当時サムエルは既に12歳を過ぎていたと記録している。**主の言葉はまれで** エリとその息子の時代の霊的低迷を反映している言葉かもしれない。また、過去の士師の時代とこれからの預言者たちの活動の時代とを分ける意味の言葉であるのかもしれない。

2 **目がかすんで** エリ自身の高齢であることを示すと同時に、前週のもの語よりかなりの時間の経過を示す言葉でもある。同時に4章以下の伏線ともなっている。エリの霊的な意味での「目のかすみ」を示す言葉である。またこのことが、サム

エルが「聖所」に泊まってその務めを果たしていた理由とも考えられる。

3 **神のともしび** 出エジプト25・31〜40に描かれている、7つの枝のある燭台ではないかといわれている。この燭台は、神の契約の箱が入れられている至聖所の外の聖所におかれていた。**まだ消えず** 夜明け前の頃のことであろう(レビ24・3)。**神の箱** 神の臨在の象徴とされた箱。中には契約の石板(十戒)が納められており、「契約の箱」と呼ばれる場合も多い。ヨルダン渡河ではこの箱を先頭にして祭司が立ち(ヨシュア3・13)、カナン入国後はシロの神殿に安置された。4章ではペリシテの戦いでこの箱が戦場に出陣してペリシテに奪われてしまうのだが(4・11)、後には返還されてキリアテ・ヤリムに安置される(7・1)。最終的にはダビデがエルサレムに移した(サムエル下6・12)。**サムエルが神の箱のある主の神殿に寝ていた** 前節にも記述しているように、エリの高齢のゆえかもしれないが、そのことをも主が用いてくださって、サムエルの召命という出来事を主が起こしてくださったとみるべきであろう。イザヤの神殿の幻(イザヤ6章)、ベテルにおけるヤコブの幻(創世記28・11〜18)にも、神殿における召命は見取れる。



4 聖書によって多少訳し方が異なるが、内容そのものには大差はない。

5～9 このような物語の中で、反復の意図するところは重要である。これは、緊張感を高め、召命に対する現実感を聴衆に呼び起すのに一役買っている。一方で、祭司エリは勘違いをして3度にわたってこの少年を下がらせる。先週の箇所と相まって、善良ではあるが霊的に少々抜けているエリの人柄を描き出している。

7 主を知らず 一般的な信仰や敬虔さの意味ではなく、個人的直接的語りかけ、という意味の「知る」。本節では、「主を知る」ということと、「主の言葉」とが並んで語られる。

それは、主を知ることとは、人間の知覚的、客観的な対象として「主を知る」ということではなくて、その御旨をみ言葉によって知るという、人格的、主観的な関係における「知る」ということなのである。

9 前節後半より、エリはサムエルの上に起こっている出来事を自らの経験によって察した。こうしてついにエリはサムエルに適切な指示を出すことができたのである。

10 主はきて立ち 語りかけるばかりでなく、目に見える形でそばに立った、すなわちここでサムエルは、言葉と幻の両

方を受けたのである。この行為は、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」という信仰の姿勢に対する語りかけである。立つ 象徴的に「自分自身を現わす」ことを意味する。

11 耳が二つとも鳴る 想像を超えた厳しい宣告がなされるときの表現である。特に、災いの知らせやその知らせに圧倒されるときに慣用的表現でもある(列王下21・12、エレミヤ19・3)。

12～14 エリは最後には、その息子たちと共に破滅の道へと歩まなければならない。これは恐ろしい現実である。彼の罪は、息子たちが何をしていたかを知っていたにも関わらず、彼らのその行いを見過ごし続けてきたからである。かつてエリの家について話したこと 2・27～36。

祭司の罪のためには犠牲の儀式によって備えがなされていた。しかし、それはあくまで誤って犯した罪のためである(レビ4・2)。しかし、エリの息子たちが犯した罪のように、彼らの冒瀆的な行為に対しては、いかなる犠牲によってもとりなすことは不可能であった。永久に その裁きが徹底してなされることを物語る。

参考図書 1月6日分のほか、田淵結訳『サムエル記(ケンブリッジ旧約聖書注解⑧)』(新教出版社) 他。



## 聖書

サムエル上3:1-14

## タイトル

神の声を聞いたサムエル

## 暗唱聖句

しもべは聞きます。主よ、お話しください。

サムエル上3:9

## 目標

日々、神の御声を聞いて生きる。

## 導入

(松浦みち子)

皆さんは名前を呼ばれたら「はい！」って返事ができますか？知らんぷりをしたり、無視したりするのでなく、いつでもどんな時でも、「はい！」と返事しましょう。とっても大切なことです。そして、返事をしたら、その通りに行動する、そんな素直な心を神様は祝してくださいます。(用意するもの ジョシユア・レノルズの「祈るサムエル」の絵)

## 神様に呼ばれたサムエル

サムエルは小さいころから祭司エリ先生のところに預けられ、神様のお仕事のお手伝いをするようになりました。お母さんから離れて寂しかったでしょうね。でもお母さんは、毎年神殿に礼拝に来るとき、サムエルに合うサイズの服を祈りながら縫って持ってきてくれるので、サムエルは

お母さんの愛の詰まった服を身に付けてちつとも寂しくありませんでした。幼いながら一生懸命、エリ先生にお仕えし、掃除をしたり、明かりが消えないようにともしび皿を磨いてよく働きました。そして「神様のお役に立つことができますように」と、いつもお祈りをしていました。(絵を見せる)。

年を取ったエリ先生は、もう目がかすんで見えなくなりました。そして、神様のお言葉もほとんど聞くことができなくなりました。そんなある夜のことです。サムエルはいつものように神の箱が置いてある神殿でひとり寝ていました。すると「サムエルよ、サムエルよ」とどこからか呼ぶ声がします。「はい！ここにおります」と飛び起きてエリ先生の寝室に走って行きました。「先生、何か御用ですか？」

「いや、わたしは呼ばなかったよ。帰って寝なさい」とエリ先生は言いました。サムエルは変だなと思いました。が部屋に帰って寝ました。しばらくすると「サムエルよ、サムエルよ」とまた呼ぶ声がします。サムエルはすぐに起きてエリ先生の所へ行き「はい、先生、お呼びになりましたか。」「いや、呼ばなかったよ。サムエル、もう一度寝なさい」。サムエルは夢をみたのかなあと不思議に思いながら戻って

寝ました。しばらくすると三度目の声がします。「サムエルよ、サムエルよ」。サムエルはエリ先生のもとに走って行き「先生、お呼びになりましたか？わたしはここにおります」と言いました。その時、エリはハッと神様がサムエルを呼ばれたことに気づきました。エリは「行つて寝なさい。サムエル、神様がおまえを呼んでいらつしやるのだ。今度、お呼びになったら『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言うのだよ」と教えてくれました。「不思議なことだなあー」と思いながら、また横になつて寝ました。神様はもう一度、声をかけてくださったでしょうか。

### 神様の声を聞くサムエル

しばらくすると「サムエルよ、サムエルよ」と呼ぶ声がしました。4度目です。エリ先生に教えられたとおり「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と言いました。神様はサムエルにこれから起こることをお告げになりました。それを聞く者の耳が二つとも鳴るような恐ろしい裁きの言葉でした。神様は「エリは、息子たちがひどく悪いことをしているのを知りながら、注意もせず、叱りもしなかった。エリの家の罪はどんなことをしても赦されない。わたしはエリの家に永久に罰を与える」という言葉でした。サ

ムエルはひと言も聞き漏らさないように一生懸命耳を傾けました。サムエルが神様の言葉を聞いたのはこれが初めてのことでした。サムエルの最も大切な役割は、神様の声に耳を傾け、人々に正確に伝えることでした。エリの家のさばきを伝えることはつらい事でしたが、これもまた神の言葉をまげないで伝えるという大切な、サムエルに課せられた役割だったのです。

神様は、今の時代の私たちに対して聖書を通して語りかけておられます。いつも神様に心を向けているならあなたにも神様は語りかけて下さいます。あなたは祈る時、何を最初に祈りますか？自分のしてほしいことや欲しいものを願いますか？それとも他の人が必要としているもののことですか？祈る時、一番大切なことは神様のみこころを知ることです。神様が何を願っておられるのかを聞く心で祈りましょう。「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と。心の耳を澄ませてみ言葉を読むなら、あなたにわかるように神様は語ってくださいますよ。主は生きて今も働いておられるからですね。なんとうれしい神様との交わりでしょう。

♪祈つてごらんわかるから♪

(新聖歌481)

# 聖書 サムエル上16・6～13

## テーマ 心を見られる神

序論

(福井文彦)

イスラエルの最初の王であるサウルは、神への不服従のため主から捨てられました。サムエルはこのことをひどく悲しみましたが、いつまでも悔やみ続けることは許されませんでした。現実にはサウル王がまだ支配しているにも関わらず、神は次の王を選ぶようにサムエルに命じられたのです。そこで選ばれたのがダビデだったのです。

### 一、人の選び

サムエルは神がサウルを捨てられたことを悲しんでいました。すると、「あなたをベツレヘムびとエッサイのもとにつかわします。わたしはその子たちのうちにひとりの王を捜し得たからである」(1)と告げられたのです。そこで、サムエルはベツレヘムびとエッサイのところに出かけました。

主は、サムエルに、どの息子に油をそがれるかを明らかにしておられませんでした。エッサイの息子たちを見た時、サムエルは直感的に、神が選ばれたのは長男エリ

アブであると思ったのです(6)。彼は背が高く、外見적으로는申し分がなく、王者の風格があつたからです。年老いた父親も選ばれるのは長男であると考えていました。ところが、主はサムエルに「わたしが見るころは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る」と言われたのです。《そこでエッサイはアビナダブを呼んでサムエルの前を通らせ》ました。するとサムエルは《主が選ばれたのはこの人でもない》と言いました。そこでエッサイはシャンマを通らせましたが、サムエルは《この人でもない》と言いました。エッサイは七人の子にサムエルの前を通らせますが、サムエルは《主が選ばれたのはこの人たちではない》と言ったのです。

### 二、主の選び

神はこの家族を指示されたのに、その中に王に選ばれる者がいないなどということがあり得るのだろうか、サムエルは一瞬思つたことでしょう。そこでサムエルはエッサイに《あなたのむすこたちは皆ここにいますか》と尋ねました。するとエッサイは《まだ末の子が残っていますが羊を飼っています》と答えました。彼は、兄たちがいけにえの食事を楽しんでいる間、羊の番をしてい

たのです。

この末の子がダビデです（13）。彼がいけにえの席に呼ばれなかったのは未成年者はいけにえの食事の席につかないというしきたりのためかもしれません。しかも、羊を飼うことは、その家の最も大切にされていない家族が召使がする卑しい仕事でした。ですから、彼は家族の中でそれほど気に止められていない一員であつたと思われれます。

しかし、神が人をお選びになる時、「外見」は関係ありません。神にとつて問題なのは「心」です。それで、「わたしが見るところは人と異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る」と言われたのです。その意味は、「人は自分の目に従つてものを見るが、神は御自分の心に従つて見られる」と言うことです。人間の弱さを知り尽くしておられるお方として、あわれみに満ちた心によって見られた結果、ダビデを選ばれたのです。

### 三、心を見られる神

ダビデへの油注ぎと同時に、主の霊がダビデの上に激しく下りました。後にサウル王の侍従となり、ゴリアテとの戦いで勝利し、名声は全国にとどろきました。しか

し、このために王のねたみを買ひ、ここからダビデの苦難の生活が始まつたのです。十数年の苦難の後、ギルボア山頂でサウル王が戦死し、王となります。ダビデはエルサレムを礼拝の中心として、政教一致をはかり、敵国を徹底的に撲滅し、王国の拡張と繁栄をもたらします。彼の成功の秘訣は、ただことごとくに主に聞いて行うことでした（サムエル下5・17～25）。

しかし、このダビデにも失敗がありました。バテシバの事件、子どもとの血を血で洗うような争いです。また晩年ダビデの行つた人口調査は神の怒りと裁きを招きました。ダビデは偉大な指導者でしたが、このように完全無欠ではありませんでした。しかし、絶えず砕かれた心をもつて悔い改め、神の赦しと恵みにあずかりました。それゆえに、神に愛されたのです。神は心を見られますが、偽善でない心、砕かれた心、混じりけのない純粹な心で神を求める人を喜ばれるのです。

### 結論

心を見られる神に喜ばれる秘訣は、キリストの血に対する信仰（ヘブル9・13～14、イヨハネ1・7）と純粹な心で神を求めることです。

## 研究資料

(宮澤清志)

この箇所を扱うにあたって、先週の物語からのできごとについて目を留めておく必要がある。

## I. 契約の箱の物語(4章〜7章)

- ・ペリシテ戦敗北(4・1〜11)
- ・エリの死(4・12〜22)
- ・ダゴン神への刑罰(5・1〜5)
- ・腫物の災い(5・6〜12)
- ・契約の箱、返される(6・1〜12)
- ・ベテシメシ人の祝いの祭りと冒流(ぼうりゅう)(6・13〜21)
- ・イスラエルの悔い改め(7・1〜6)
- ・ペリシテの敗北(7・7〜12)

・サムエルの一生の働きのまとめ(7・13〜17)

## II. 国王サウル(8章〜15章)

- ・人々は国王を求める(8・1〜22)
- ・サウル、サムエルのもとに来る(9・1〜14)
- ・サウル、預言者に迎えられる(9・15〜24)
- ・サムエル、サウルを教える(9・25〜10・16)
- ・サウル、王となる(10・17〜11・15)

・サムエルの説教と主の承認(12・1〜25)

・サウル軍の遺棄(13・1〜14)

・ペリシテ軍とサウル軍(13・15〜23)

・ヨナタンの先制攻撃とペリシテの敗走(14・1〜23)

・サウルとヨナタン(14・24〜52)

・アマレク撃滅(15・1〜35)

(以上の梗概は「旧新約聖書全二巻」キリスト者学生会発行を中心とした抜粋)

以上の梗概の13章以下に見られるように、サウルは主から棄てられた。しかし、サムエルはこのサウルの遺棄をいつまでも悔やみ続けることは許されないのである。重要なことは、先週のように主の教えに素直に従う信仰の姿勢である。

## テキスト

6 エリアブ 「神は父」という名。サムエルは、エリアブの美丈夫さに強い印象を受け、彼こそが油注がれるにふさわしい人物であると判断した。

7 顔かたちや身のたけを見てはならない サウルが、誰よりも背が高かったこととの意図的な対比が語られているのかもしれない。しかし、この容姿は、彼が適任であることを妨げるも

のではない。外的な容姿はそれ自体は神からの好意のしるしである（9・2、10・23のサウルの姿や12節のダビデの姿を参照）。**わたしが見るところは人とは異なる** 直訳は「人が見ることではない」この言葉は預言者の格言となったのであろう（歴代上28・9参照）。**人は外の顔かたちを見、主は心を見る** サウルは、誰もがほめる背の高さ、美しさによって選ばれたが、ダビデは「心を見る」主によって選ばれた。

**10 七人の子にサムエルの前を通らせた** サムエルは、エッサイの7人の息子を年齢順に通らせた（17・13参照）のであろうが、その誰も、主はお選びにならなかった。サムエルが神意を伺うために、具体的にどのような方法を取ったのかは定かではないが、彼はサウルを選ぶ時には、くじを用いた（10・20く21参照）。よってこの時もくじを用いて神意を伺った可能性は十分にある。こうして彼は、この7人の息子のほかにも子がいると推測したのであろう。なお、この当時の神意を測る一般的な方法は、くじであった。

**11 まだ末の子が残っていますが羊を飼っています** 父エッサイがダビデをこの席に呼ばなかったのは、当時のしきたりで未成年者はいけにえの食事の席にはつかなかったということが考えられる（5節には、サムエルがこの席を設けた理由が語られ

ている）。さらに、羊を飼うことは、その家の最も大切にされていない家族が召使に託された卑しい仕事であった。

**12 血色のよい、目のきれいな、姿の美しい人** ここに、いわゆる「紅顔の美少年」という言葉を当てはめるべきではない。

当時、こうした外見上の美しさは神の恵みと考えられていたし、サウルもまたそうであった（9・2）。しかし、聖書における美しさとは、外形上のことだけでなく、優美な魅力と強い意欲、行動をも伴ったものであった。イザヤ53章の主イエスのお姿をここで思いめぐらすことは必要なことであらう。

**13 彼に油を注いだ** 旧約聖書においては、王と祭司は頭に油を注がれる行為をもつて就任した。この油注ぎは、神の代理者をもつて行われた。この「油注がれた者」が神の民を統治するとき、神は油注がれた者を通して王権を行使されたのである。その結果、**主の霊は、はげしくダビデの上に臨んだ** 将来において何が待っているようにも、神の備えがあるということの確信となり、また保証ともなった出来事であった。

なお、この言葉とともに、次節の「主の霊はサウルを離れ、…」という言葉も同時に思いめぐらすべき言葉である。

参考図書 1月6日に同じ。

聖書

サムエル上16・6～13

タイトル

心を見られる神

暗唱聖句

人は外の顔かたちを見、主は心を見る。

サムエル上16・7

目標

心を見られる神に喜ばれるように生きる。

## 導入

(松浦みち子)

二〇一二年六月に何十万人という人を動員してAKBの総選挙がありました。第一位には大島優子さんが約十万人の票でトップとなりました。「人は見た目が90%」などと言われ、見た印象で多くのことを判断しがちです。学級委員の選挙などもそうですね。おっと、ちょっと待ってください！人目につかないところで黙々と忠実に歩む人に大きな力が潜んでいることがあります。見誤らないで下さいよ。今日はそんな人のお話です。

## エッサイの息子たち

ある日、神様が預言者として活躍していたサムエルにおつしやいました。「サムエルよ。わたしは新しい王様になる人を見つけました。ベツレヘムに住むエッサイの

子たちの中にいます」と。サムエルはさっそくベツレヘムへと出かけました。するとエッサイは七人の息子たちを連れてサムエルに会いにきました。エッサイは長子から順番に息子を紹介しました。「これが長男のエリアブです」。サムエルは彼を見て、一目で気に入りました。「おおー背も高いし、きりつとした顔立ちをしている。頭もよさそうだし、これが王様になる人だ」と思いました。しかし、神様はサムエルに「顔かたちや背の高さなど、見た目で決めるはいけません。わたしは人の心を見決めるのです」とおつしやいました。二番目の息子、三番目、四番目と続き、七番目の息子までサムエルに会いました。しかし、神様は「この人ではない」、「この人でもない」とおつしやるのです。一体どうしたことでしょう。神様はエッサイの息子の中にいるとおつしやったのに…。

## 羊飼いの少年ダビデ

サムエルはエッサイに尋ねました。「あなたの息子さんは、これで全部ですか？」「いいえ、もう一人います。が、末っ子のダビデは野原で羊の番をしています」。サムエルは「すぐにその子連れてきてください。その子



1月

# 20日 礼拝メッセージ例

にも会いましょう」と。走ってやってきた末っ子のダビデは、日に焼け、いかにも健康そうです。目がキラキラ力強く輝き元気いっぱい少年でした。「こんにちは！」と元気よく挨拶をした瞬間、神様はサムエルに「わたしを選んだのは、この子です。さあ、この子に油を注ぎなさい」と。サムエルは、神様のおっしゃるとおりダビデに油を注いで、祝福の祈りをしました。何のことかさっぱりわからないダビデは目をパチクリするばかりでした。しかし、この日から、ダビデには神様の霊が豊かに働くようになり、日々の歩みを祝してくださったのです。ダビデの油注ぎは神様選ばれた印でしたが、サムエルのほかはまだ他にもその意味を知りませんでした。

## その後のダビデ

ダビデは選ばれたからといってすぐに王様になったわけではありません。サムエルが帰った後、また野原に行き、羊の番をしながら過ごしました。ある時は、たて琴を奏でながら神様を賛美しました。夜の野宿の時には、空の星を見ながら神様の偉大さに心ふるわせました。そんな平和な日々が続いたわけではありません。その後、さまざまな試練の中を通りました。ある時は、命をねらわれ、

死の一手手前まで追い詰められました。しかし、「神の賜物と召しとは、変えられることがない」（ローマ11・29）とあるごとく、金が純金となるために何度も炉の中を通されるように、ダビデは神様の訓練を受けました。神様は、ダビデの主に従う信仰や忠実さ、熱心さをご覧になって、やがて全イスラエルを統一し、国を建て上げる王として用いられたのです。

あなたは、いつも叱られてばかりで自分に自信のない人ですか。そうであつたとしても、がっかりしないでください。人の評価と神の評価は異なります。学校の成績表もあまり気にする必要はありません。こんな少年がいました。「ひどい出来だ。彼はまったくやる気を見せない」。十二才のミルン君は通信簿に、こう記されたそうです。少年は、のちに名作童話「くまのプーさん」を書き、世界中の子どもたちを喜ばせる人になりました。神様はあなたを愛しておられます。心を見られる神様に喜ばれるように、教会学校に励みましょう。やがての時、神様はあなたを用いて下さることでしょう。

♪じゅうじか わが力♪

（ホーリネス・こどもさんびか115）



# 聖書 サムエル上17・31～49 テーマ 大きな困難に立ち向かう

## 序論

(福井文彦)

この箇所は、多くの人たちが良く知っているダビデとゴリアテの物語です。サムエル記上の中で最も有名で、この書の中心部分でもあります。これは単に、若者ダビデがイスラエルの恐れていたゴリアテを倒して勝利したという物語ではなく、ダビデの信仰による勝利です。

## 一、ゴリアテの挑戦

イスラエルはエラの谷でペリシテと対峙たいじしていました。その時、ペリシテの中から、ガテのゴリアテが戦いを挑むために出て来て、四十日間、朝夕叫びました。彼は両軍が戦うよりもそれぞれ一人ずつ代表を選び決着をつけようと提案したのです(8～9)。

ゴリアテはペリシテ人の代表戦士であり、無敵と考えられていました。ですから、イスラエルの軍勢は震えながら、彼が大きな叫び声を上げるのを聞いているだけでした。イスラエルのだれ一人、その挑戦を受けて立つことができな

かったのです。

ダビデは父エッサイの命令で、戦場にいる兄たちの安否を知るために、イスラエルがペリシテと対峙している戦場に來ました。そこで、ゴリアテの威嚇いかくする叫びを聞き、それを非常に恐れているイスラエルの人たちを見ました。しかし、ダビデは、誰だれであれ、いかに強くとも、イスラエル(の神)が侮辱めづされることに怒りを感じたのです(26)。

## 二、ダビデの挑戦

ゴリアテの挑戦に対して戦おうとしているダビデを、サウル王は呼び寄せて確かめました。するとダビデは「だれも彼のゆえに気を落してはなりません。しもべが行つてあのペリシテびとと戦いましょう」と大胆に申し出たのです。彼は、これは神とペリシテ人との戦いであり、むしろ、この挑戦を神の御力を証明する好機とみなしたのです。

しかし、サウルは「あのペリシテびとと戦うことはできない」と止めました。というのは、サウル王の目には、軍人で見えるからに強そうなゴリアテと違い、ダビデは若年で戦争の経験がなく弱々しく映つたからです。そこでダビデは、しし、あるいはくまが来て、小羊を取った時、しし、

くまを撃って、小羊をその口から救い出した経験を話しました。この神はダビデを、ししやくまから救い出したお方であり、生きておられるがゆえに常に救うことができるのです。それゆえダビデは「主は、またわたしを、このペリシテ人から救い出される」と確信できたのです。この力強い神の守りの証しを聞いたサウル王は安心し、ダビデがゴリアテと戦うように、「行きなさい」と送り出しました。

### 三、信仰の勝利

そこで、サウル王は「自分のいくさ衣をダビデに着せ、青銅のかぶとを、その頭にかぶらせ、また、うることじのよろいを身にまとわせ」ました。しかし、ダビデはそれを脱ぎ捨てます。そして、ダビデは初陣の青二才にすぎないのに、戦いのためゴリアテとは対照的な準備をしました。槍の代わりの杖、弓の代わりの石投げ、矢筒の代わりの羊飼の袋、矢の代わりのなめらかな石五個でした。

一方のゴリアテはまるで戦車のように甲冑で身を固め、非常に頑丈な攻撃用の武器を手にしていました。ダビデよりもはるかに背が高く、熟練した兵士でした。ゴリアテは自分の戦果を誇り、これから成し遂げようとしていること

まで自慢げに語りました。しかし、ダビデは「わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいんだ、イスラエルの軍の神の名によって、お前に立ち向かう」と、ただ神に信頼して戦いに挑みました。

見守る者たちが待つ暇もなく、対決は終わってしまいました。ダビデが袋から取り出した一つの石を石投げで投げて、ゴリアテの額を撃ったので、石はその額に突き入り、うつ向きに地に倒れました。ダビデはゴリアテのつるぎをとって、彼の首をはね、殺しました。その結果、ペリシテ人は総崩れとなりイスラエルが勝利したのです。

これは主の戦いであること（47）、そして、主は必ず勝利を与えてくださるとの神への信頼と確信をもって、敵に向かった信仰による勝利です。

### 結論

人生にはさまざまな戦いがあります。しかし、どんな時も、ダビデのように神を信じ、神に頼る、神への絶対依存の信仰に立つことです。ダビデが谷間から石を拾い上げたように、密室の祈りによってみ言葉を受け、これを御霊の力によって用いることが勝利の秘訣です。

## 研究資料

(宮澤清志)

この若き信仰者ダビデとゴリアテとの戦いは、ダビデ物語の中で最も有名であり、親しみ深い物語の一つとして知られている。それであるがゆえに、説教者は前提なしでこの箇所に向き合うことが求められる。

## テキスト

**32 あの子** ゴリアテのこと。実は、12〜31節までは、ギリシャ語訳旧約聖書（70人訳聖書）には記されていない箇所である。普通に読んでみるとつながりが不自然と思われる箇所があるのはそのためである。**だれも彼のゆえに気を落してはなりません** この言葉は11節からつながっていると考えると理解しやすくなる。

**33 年少** ダビデは年若く、また新たに宮廷に召された者であった。またこのような戦闘に不慣れでもあったというのである。次のゴリアテと対照していることは明らかである。**若い時から**の軍人 いわゆる職業軍人。またこのゴリアテは異民族の傭兵（給料を与えて雇う兵士のこと）であつたのではないかという見方もある（サムエル下21・22、歴代上20・8）。

**34 しし、あるいはくま** ライオンや熊は、聖書時代のパレス

チナ一帯に広く生息していたと考えられている。アジアのライオンはアフリカのライオンとよく似ている。さらに旧約聖書に言及されている頻度も高い（約130回）ことから、ライオンは聖書時代のパレスチナにはごく普通に見られた動物であつたのである。一方、熊もパレスチナ一帯には広く生息していたと考えられている。しし、くま、ペリシテ人、の語順については、ライオンは比較的行動の予測がつきやすい一方、熊は何をするか分からないとされ、特に飢えた熊は凶暴であつたといわれている。つまり、しし↓くま↓あのペリシテ人、という順序で危険度が増すという意味である。

**37 ししのつめ、くまのつめからわたしを救い出された主は、** ダビデは、このようなししやくまからの救出の背後には、主がおられたという確信があつた。このお方は生きているがゆえに、常に常に私たちを救うことができるのである。後半のダビデの告白は、この確信からきた言葉である。

**38〜40** サウルはダビデに自らのよろいかぶとを身につけさせようとした。一国の王が自らのよろいかぶとを貸し与えたということは、サウルはこの戦いが非常に重要であることを認めていた、ということであろう。しかしダビデは大柄なサウル（10・23）のよろいかぶとを身につけることはできなかった。借り物

の武器では動きが取れなかったのである。そこで、彼は自らの慣れ親しんだ方法で戦うことを決意する。

**40 石五個** なぜダビデが石を五個取ったかはわからない。おそらく一個でも問題なくゴリアテを倒すことはできたであろうし、石五個をすべて使い切ったとしても何の問題もなくダビデは勝利者でありえたであろう。しかし、敵はゴリアテだけではなく、ペリシテの全軍であった。

また、当時の軍隊では石投げの一隊が常備されていた。正確に石を投げることは、高度に熟達した技能であったであろう。

**41〜42** 若くて血色がよく、姿も美しいダビデに対して、完全重武装（4〜7）したゴリアテが侮った（42）ことはわからないでもない。

**43〜44** ゴリアテの侮りの言葉。この言葉から、ゴリアテが相手であるダビデを見て、侮り以上に侮辱の感情さえ抱いたことを示唆している。

**43** 70人訳聖書では「杖と石とをもつて向かってくる」とは、俺は犬なのか？」とある。そこでダビデは言った「いや、犬よりも悪い」。犬 この言葉は今でも中近東では侮蔑の言葉とされている。

**44 おまえの肉を、空の鳥、野の獣のえじきにしてくれよう**  
イスラエル人にとって、しかるべき葬りを受けずに遺体が放置

されることは、最も悲惨な死に方であり、このことは恐るべき事態であった（詩篇79・2〜3、列王下9・10、エレミヤ7・33等）。

**45〜47** ペリシテ人ゴリアテの侮辱に対するダビデの言葉。この言葉も侮蔑的な響きを持つ言葉である。人間の分際を忘れ、自分の強さに過信したペリシテ人が、イスラエルの神の実在とその力に挑もうとする愚かな姿をあざけっている。この戦いは、「つるぎと、やりと、投げやり」対「万軍の主の名」の戦いであり、主の「救」（47）のための戦いなのである。そしてこの戦いの先には「イスラエルに、神がおられることを全地に知らせ」（46）ることが意図されている。出エジプトの出来事をはじめ、イスラエルの勝利は神の勝利のあとをなぞったにすぎないのである。

**48〜49** ペリシテ人が立ち上がり、近づいてくるのを見て、ダビデは急ぎ走り出て、石投げで石を投げ、ゴリアテの手の込んだ武器のただ一点の急所を命中させるほどの正確さでこのペリシテ人を倒した。おそらく彼は石投げによって気絶したのであろう。その後、ダビデはゴリアテ自身の剣を取ってその首をはね、絶命させたのであろう。

参考図書 1月6日に同じ。

## 聖書

サムエル上17・31〜49

## タイトル

ダビデとゴリアテの対決

## 暗唱聖句

主は救を施すのに、つるぎとやりを用いられないことを知るであらう。

## 目標

共におられる神に信頼して、大きな困難にも立ち向かう。  
サムエル上17・47

## 導入

(松浦みち子)

皆さんが今まで出会った中で一番背の高い人は誰ですか？今、世界一背の高い人は、ロバート・ワドロフさんで、なんと272cmだそうです。ずいぶん高いですね。でも、聖書には、6キュビト半もある大男が登場します。1キュビトは約45cmですから、計算すると290cmほどの背の高さです。ヒエー、もうビックリです！今日はそんな大男のお話ですよ。

## 大男ゴリアテ

ある時、ペリシテ人がイスラエルに戦いをしかけてきました。谷を挟んでペリシテ軍とイスラエル軍はにらみ合っています。その時、身長が3メートル近くもある大男が前に出てきました。ペリシテ軍の代表戦士のゴリアテです。重いよろいを軽々と着

て、頭には青銅のかぶと、足には青銅のすね当て、肩には青銅の投げやりを背負い、手には太い槍を持っています。そのゴリアテが大声で叫びました。「だれか、おれ様と勝負する者はいないか？一対一でだぞ！もし、おれを倒したら、ペリシテはお前たちの奴隷になる。だが、おれが勝ったらお前たちは奴隷だ！さあ、誰かいないか」。ドッシーンと足踏みします。イスラエルの兵隊たちは、ぶるぶる震えるばかりで戦う勇気ある者はいません。

## 戦いに挑むダビデ

そんな時、ダビデはお父さんのお使いで、戦場にいるお兄さん達に食べ物を持ってきました。そして、ゴリアテの大声を聞いたのです。「なんだ、お前たちはおれと戦うのが怖いのか。ハッハッハア。イスラエルに勇気あるやつはいないのか！」ダビデは顔を真っ赤にして怒りました。「あの大男は何者なので、生ける神様の軍をバカにするのか！ぼく達には神様がいつも一緒にいておられるんだぞ！」ダビデはサウル王様に力強く申し出ました。「わたしがあのペリシテの大男と戦います」。「何だと。お前はまだ若いし、相手は若い時からの軍人なんだ。無理だよ！」「いいえ、王様、わたしは羊の番をしています、ライオンやくまが襲ってきたとき、この手で打ち殺して羊を助

け出しました。また、飛びかかってきた時は、ひげをつかみ殺しました。あのペリシテ人も獣と同じようになるでしょう。生ける神様の軍隊をバカにしたのですから。ライオンの爪や熊の爪からわたしを救い出してくださった主は、このペリシテびとの手からきつと救い出して下さるでしょう」と言いました。王様は「行きなさい。主があなたと共におられるように」と。王様は自分のよういかぶとを使うように言いましたが、不慣れで身動きできません。ダビデは、いつも持つている杖と、谷間から拾ってきたなめらかな石五個、石投げを手に取ってゴリアテに近づいていきました。

### ダビデの勝利

ゴリアテは、背も小さくよろいも身に着けず杖をもつて近づくダビデに、「杖をもつて、向かってくるが、おれ様は犬なのか。さあ、向かってこい！おまえの肉を空の鳥、野の獣の餌食にしてくれよう」とあざ笑いました。ダビデは「おまえは、つるぎと槍を持ってわたしに向かってくるが、わたしはイスラエルの神、万軍の主の名によって戦うのだ。きょう、主はおまえをわたしの手に渡される。わたしは、お前の首をはね、空の鳥獣の餌食にしてくれよう。主は救を施されるのに、つるぎとやりを用いられないことを知るであらう。この戦いは主の戦いだ！」

と。ゴリアテはカツとなつて向かってきます。ダビデは素早く、袋の中から石を取り出し、石投げでエイッ！と石を飛ばしました。ピューン、バシッ、「ウオー！」、ドッシーン。地響きを立ててゴリアテが倒れました。石が見事に額に命中したのです。ペリシテ軍はあわてて逃げていきました。ダビデは神様の力によって勝利したのです。バンザイ！ハレルヤですね。

皆さんには大男のように、あなたの前に立ちはだかるものがありますか？自分の力を誇つて、自分の力で解決しようと頑張るのではなく、神様により頼みましょう。ダビデは使い慣れた石投げで勝利しましたね。あなたを守つて強めるものはなんでしょう。それはみ言葉です。「御言には、あなたがたのたましいを救う力がある」のですから（ヤコブ1・21）。最後に、ダビデに一発勝利をもたらした石は、なめらかな石でした。ゴツゴツした石ではなく、角のとれた丸みのある石でした。これは手になじみやすく、ねらいをつけやすかったのです。わたしたちも神様に用いられるためには、従順で謙虚でなめらかな者でなければなりませんね。み言葉をすなおに受け入れ、主に従っていきましょう。

♪雄々しくあれ♪

（新聖歌486）

# 聖書 列王上3・3～28

## テーマ 知恵を求める

序論

(高橋頼男)

国を手中に収めたソロモンは、ギベオンに行きそこで一千の燔祭<sup>はんさい</sup>を主にささげました。主はソロモンに夜の夢の中に現れ「あなたに何を与えようか、求めなさい」と言われました。ソロモンは、自分が小さい者であること、委ねられた民はおびたしいことを告げて「それゆえ、聞きわたる心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ、わたしに善悪をわきまえることを得させてください」と願い求めました。主は、このソロモンの求めを大変喜ばれました。

### 一、ソロモンの求め(6～9)

〈主を愛し、父ダビデの定めに歩んだ〉ソロモンが求めたのは、善悪を判断し民をさばくための聞き分ける心でした。これは、王としての立場が与えられたことによる求めでした。王位についた者の自信ではなく、むしろ受け継いだ立場や使命に対する厳粛な自覚から出たものでした。彼は自分がふさわしい者であるとか能力や資質において十分であるとか決して思いませんでした。むしろ恐れとおのきから祈り求めた

のです。自分の無力を感じるところから求めたのです。彼は王としての力、軍事力、敵の命、自分のために富や長命を求めませんでした。ただ純粹に王として立てられた者の使命感により、与えられた責務を全うするために求めました。

私たちが求めることや、何を求めるかを通して、私たちの価値観や世界観、信仰や霊性が明らかになります。神に「あなたは求めなさい」と言われたなら、私たちは何を、どのように、どう求めるでしょうか。若い人たちから「別に」と返事が返ってきてがっかりしたことがあります。すぐ答えられずに返事に窮したことだったかもしれません。しかし、私たちの求めがいつも漠然としていて、明確で切実な求めがないなら、そのことがまず問題なのではないでしょうか。

「主よ、見えるようになることです」と、瞬時に主に応えることが出来たバルテマイは、自分の不本意な生活の問題点をよくよく知っていました。そして、なんとか解決を与えられたいと切なる願いを持っていました。彼は決して見えていないままの生活に慣れてしまうことはなかったのです(マルコ10・51)。

### 二、ソロモンのさばき(16～28)

ソロモンが主に願って与えられた知恵を実証するさばきの



例が出てきます。これは有名なソロモンの名さばきですが、どこかで聞いたお話と似ています。しかし、時代はソロモンの方がはるかに昔です。二人の遊女の訴えに対して解決が得られず、ついに王であるソロモンにまでこのような訴訟が上げられてきたのでしょうか。それゆえ、王がこの問題をどうさばくかは、国民の大きな関心を集めました。ソロモンの明快で、人情に精通した鮮やかなさばきにイスラエルの民は、〈神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをする〉のを見たのです。

### 三、知恵を求める

私たちにも知恵が必要です。まず、神を恐れることこそ知恵の始まりであることを覚えましょう（箴言1・7）。

また、日々の生活の中で問題にあたる時、神の知恵を求めみこころにかなう解決を導かれましょう。神は、求めるものに惜しげもなく知恵を与えてくださいます。

「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願ひ求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」（ヤコブ1・5）。

ソロモンが求めた善悪を判断する力は神による識別の賜物

であり、神のみこころを知ることです。良い結果や効果的な結果ではなくて、正しい方法に対する求めです。神に求めることは、神との交わりの中に入り交わりの中に生きることです。

ソロモンが求めたものは長寿、富、敵の命ではありませんでしたが、長寿や富を求めることが悪いということではないでしょう。当時は、長寿や富は神の祝福のしるしでした。しかし、それがいつも第一の願いなら問題となります。神との関係が正しく保たれ、神のみこころにかなう事こそ最も大切なことです。私たちに必要なものは、この世の知恵や知識、情報ではなく、御霊の知恵であり、そのために御霊に満たされることです。教会に人々を迎え、魂を捕え導くためにどうしたらよいのか、教会が直面しているさまざまな問題や課題を解決するために、聖霊の知恵が、神の導きが必要です。

### 結論

私たちも当面する多くの問題の解決のために、上からの知恵を切に祈り求めましょう。みこころを求め、神との交わりの中で祈り求めましょう。



## 研究資料

(金井由嗣)

旧約聖書の知者（賢者）の代表、ソロモン王の登場である。「知恵」は古代オリエント世界全体に広がりを持つ文学上の主題であり、ソロモンに帰せられる文書にも、古代世界の様々な伝統が取り入れられている（G・フォーンラート）。

けれども、聖書においてはソロモンのたぐいまれな「知恵」が神からの賜物であることが第一に強調されている。知恵の起源を問うことは、その目的を明らかにすることでもある。「いかに優秀であるか」よりも、「何のために（あるいは誰のために）知恵を用いるか」ということが最も大切なことであり、そのような価値基準を持つこと自体が、神から来る「知恵」をこの世の知恵と区別するしるしとなる。

## テキスト

3 ソロモンは主を愛し、父ダビデの定めに歩んだが、ただ彼は高き所で犠牲をささげ、香をたいた。古代イスラエルでは各地の地方聖所（高き所）が神礼拝の拠点だった。ソロモン自身による神殿建設が成される前には、王

も地方聖所で礼拝を捧げることがあった。いずれにせよ、ここではソロモンが王としての活動を始める前に主を礼拝し、祈って導きを求めたことが重要である。

6 あなたは大いなるいつくしみを彼に示されました。

またあなたは彼のために、この大いなるいつくしみをたぐわえて：ダビデに対する神の「いつくしみ」（ヘセド）こそが、ソロモンが王位に就いたことの根拠であることを認めている。「ヘセド」はイスラエルとの契約関係における神の真実を表す言葉である（『聖書神学事典』「あわれみ」の項目参照）。ソロモンの王権が、彼の能力や資質ではなく神の真実に根拠を置いている、との彼の信仰告白が大切である。「知恵」（能力）があるから王となるのではない。彼を王として任命した神の真実が、使命を遂行するために必要な能力（知恵）の源泉となるのである。

7 わたしは小さい子供であって、出入りすることを知りません。新共同訳では「わたしは取るに足らない若者で、どのようにふるまうべきかを知りません」とある。年齢よりも、為政者としての経験不足が問題であったであろう。ソロモンはダビデの晩年の子であり、さしたる帝

王教育も受けておらず、軍隊を指揮した経験もなかった。

9 それゆえ、聞きわける心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ、わたしに善悪をわきまえることを得させてください。ソロモンが神に求めたのは「聞き分ける心」であり、その目的は主の民を正しく裁くこと、善と悪とをわきまえる（判断する）ことであつた（「さばく」

「わきまえる」の動詞は、目的を表す不定詞）。王の果たすべき役割を「正しく裁く」こと、すなわち統治における正義の実行であると理解していることに注意。

10 そのことが主のみこころになつた。ソロモンの願いは神の御心になうものであつた。晩年のソロモンは政略結婚に伴つて偶像礼拝をイスラエルにもたらし、聖書はそのことを強く非難している。しかし、だからといって彼が治世のはじめに知恵を求めたことが誤りだったとか不十分だったと考えるべきではない。若きソロモンが王としての統治において正義を貫徹するための知恵を求めたことを、主は喜ばれたのである。

11 自分のために長命を求めず、また自分のために富を求めず、また自分の敵の命をも求めず、ただ訴えをききわける知恵を求めたゆえに、主が喜ばれたのは、ソロモ

ンが王の地位を特権（利益を得る権利）ではなく、果たすべき責務として理解し、その責務を全うするための能力を第一に求めたからであつた。自分の利益のために地位や権力を求めることは神の御心に反する。しかし、神に召された地位にふさわしい責務を全うすることは御心になうことである。

12 見よ、わたしはあなたの言葉にしたがつて、賢い、英明な心を与える。主はソロモンの願いを受け入れて、彼が願つたもの（知恵）を惜しみなく与えてくださった。知恵は努力や才能によつて得られるものではなく神からの賜物である。あなたの先にはあなたに並ぶ者がなく、あなたの後にもあなたに並ぶ者は起らないであろう。ソロモンの知恵は神からの賜物であるが故に、この世の賢者たちの知恵とは根本的に違つている。知恵の量ではなく、質の問題であるが、神の賜物であるからこそ具体的な働きにおいてもこの世の知恵を凌駕するのである。16節以下には彼が知恵の賜物を発揮した実例が記される。

参考図書 G・フォン・ラート『イスラエルの知恵』、『聖書神学事典』、J・ブレンキンソップ『旧約の知恵と法』、Keil&Delitzsch。

## 聖書

列王上3・3～28

## タイトル

知恵を求める

## 暗唱聖句

わたしに善悪をわきまえることを得させてください。

## 目 標

列王上3・9  
神からの知恵によって生きる者となる。

## 導入

(水野晶子)

先週はダビデが大男のゴリアテを、つるぎとやりでなく、いつも用いている石投げで見事に倒したお話を聞きました。ダビデは神様を恐れ敬い、神様からの知恵と力をいただいて、立派な王様になり、イスラエルの国は大きく強くなりました。やがて、ダビデの後を継いでソロモンが王様に任命されました。ソロモンはどんな王様になったでしょう。

## ソロモンの願う

若いソロモンは、王様としてどのように国を治めて行ったらよいのか心配していました。ギベオンの地で一千頭もの牛や羊を神様にささげて、礼拝をした夜、神様が夢に現れて「あなたに何を与えようか、求めなさい」と聞かれたのです。

もし、神様が「何でも願うことをかなえてあげよう」と

言われたら、あなたは何を求めますか？

「サッカーの試合にレギュラーで出場できますように」、「テストでいい成績が取れますように」いろいろありますね。でも、なかには「急に言われてもわからない」、「何にもない」という人もいるかもしれません。これではさびしいですね。神様に具体的に祈り求めていくことは、とても素晴らしいことです。

さて、ソロモンは何を求めたのでしょうか？

「神様は、私を王としてくださいましたが、まだ若くて何の力も経験もありません。どうか、人々を正しく導くことができるように知恵を与えて下さい。何が良いことで、何が悪いことなのか見分ける心を私にください」と求めました。ソロモンは、王様としての仕事を果たせるように、最も大切なものを求めたので、神様は喜ばれ、その他のものも添えて与えてくださったのです。

## 神様からの知恵が与えられて

ある日のことです。二人の女の人がソロモン王を尋ねてきました。どうしても解決していただきたい問題があったからです。

「王様、私たちは同じ家に住んでいます、この人の赤ちゃん

2月

3日

## 礼拝メッセージ例

んが寝ているうちに死にました。この人は私の子と死んだ赤ちゃんを取り換えたのです」。もう一人の人が必死に「いいえ、生きている赤ちゃんは私の子です」。すると、「違いわよ、この子は私の子!」と二人とも譲りません。王様は、家来に刀を持って来させ、「この子を半分に切つて、二人で分けなさい」と命じました。すると、片方の女の人は真つ青になつて言いました、「王様、その子を殺さないでください。その子を彼女にあげてください」と。もう一人は「そうです。二つに分けてください」と言いました。それを聞いた王様は「殺さないでください」と言った女の人こそ本当のお母さんだとわかり、赤ちゃんをその人に、渡すように命じました。この裁判は、ソロモン王が神様から知恵を与えられたことを、イスラエルの民に証明する絶好の機会になつたのです。

### 知恵を求めよう

私たちも、知恵を求めましょう。知識は学校の勉強や、本、インターネットで身につけられます。しかし天からの知恵は、神様に祈り求めることが必要です。毎日の生活の中での問題や、友達などとの人間関係、将来のこと、環境問題や世界の情勢など、困難はたくさんあります。私には

関係ないと思わないで、みんなで神様に知恵を求めて、解決していく必要があります。現在は情報がたくさんあり過ぎて、何が正しくて何が悪いのか判断することが難しいのです。ですから、神様に知恵を求めて、いつも神様のみこころを選ぶことができるようにしましょう。

「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願ひ求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」(ヤコブ1・5)と約束されています。

毎日、神様に求めましょう。学校の授業においても知恵が与えられて、十分理解し、生活にあてはめられるように求めましょう。

友だちに神様や教会学校のすばらしさを知ってもらうためのアイディアを、神様に求めましょう。

友だちみんながしていることでも、良いことや悪いことがわからないときはまず祈つて、平安がなければ、それをしていない勇気をいただきましょう。

具体的な祈りを通して、神様との交わりが楽しくなり、神様をもっと身近に感じて歩みましょう。

♪祈つてごらんよわかるから♪

(新聖歌481)

# 聖書 ルカ21・1〜4 テーマ 神に喜ばれる献げ物

## 序論

(高橋頼男)

この「やもめの献金」の記事の中で、ドキッとするものが二つ出てきます。一つは、イエスは金持ちたちの献金する様子や貧しいやもめが献金するのを注意深く〈見られ〉たことです。(私は礼拝の時、信徒の方が献金する様子は出来るだけ見ないように心掛けているのですが…)。

さらに、それぞれがささげた献金について〈あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ〉と献金を比較して評価されたことです。

この記事の真意と私たちの献金についてもう一度考えてみましょう。そして、神が喜ばれる献げ物について深く思い巡らしましょう。

## 一、金持ちたちの献金(1)

金持ちたちが宮でささげものをしていました。神殿の壁に取り付けられた真鍮しんちゆうのラッパのような形をした献金口に、袋から取り出された硬貨がジャラジャラと大きな音をたてて投げ入れられました。そうとうな額が投げ入れられたことがわ

かり、周囲の人々は思わず振り向きしました。彼らは金持ちで、有り余る中から投げ入れたのです。残りを十分取っにおいて、余裕をもってささげたのです。彼らは、人前でのこのような献金行為が好きでした。

## 二、やもめの献金(2、4)

ひとりのやもめが来て、誰に知られることもなく、そっとささげものをしました。彼女がささげたものは、彼女の手に握られていた汗ばんだレプタ銅貨二つでした。高速道路では、これ以上遅く走ってはならないという「最低制限速度」という規定がありますが、レプタ二つは、神殿においてこれ以下のささげものを献げてはならないという「最低制限献金額」という規定すれすれのものでした。2レプタ以下の献金は献げ物ものとはみなされず、むしろ神を侮辱する行為とされたのです。

## 三、「だれよりもたくさん入れた」(3)

それぞれの信者によってささげられた献金に多い少ないがあるのでしょうか。少なくともこの場合、主は「ある」と言っておられるのではないのでしょうか。では、何を基準に多いか少ないかが定められるのでしょうか。単に金額の多い少ないではありません。それは、「私たちに委ねられた収入総額に

対する献金額の比率(%)、あるいは、「その人が神にささげた後に残った金額」という言い方ができるかもしれません。

J・ウエスレーは、「自分の必要最低限の生活費を除く残り全額をささげ、決して余分な金額を持たないように気を付け、神と財布とを一つにした」といいます。(ペラカ六月号・誌上説教)

全ての信仰者がこのような献金ができるとは限りません。しかし、このように所有に対して全く聖別された、シンプルな経済感覚を少しでも身につけたいものです。私たちの惰性的な献金が戒められ、主の前に新しいチャレンジを受ける必要があります。

#### 四、神に喜ばれる献物

このやもめの献金「レプタ二つ」に込められ、表現された信仰こそ、主がご覧になって喜ばれ評価されるささげものです。それは、少なくとも次のようなささげものです。

①神への感謝 これは神に対する溢れる感謝の表現となった献金でした。

②神に対する信頼 彼女がささげたレプタ二つは、彼女の生活費であり、しかもその全部でした。生活費は自分のいのちを支えるための最後のお金です。そのいのちのお金をささげ

ることは、自分の一切の必要は、神が必ず満たしてくださるとの信仰と信頼があつてこそ可能です(ピリピ4・19)。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ6・33)。

③神への献身 彼女が2レプタをささげても、ささげなくても、神の宮の倉には何ら変わりがありません。しかし、彼女の持つ全てである2レプタをあえてささげるにより、彼女は卑しい自分自身をささげたのです。

「自分自身をまず、神のみこころにしたがつて、主にささげ…」(Ⅱコリント8・5)。

自分をささげることのない献金は、必ずささげ惜しみをします。

#### 結論

献金は神への感謝、信頼、献身です。主が私たちのために、どれほどの献身をしてくださったのでしょうか(ピリピ2・6・8、Ⅰヨハネ3・16)。また、私たちはこの地上で旅人であり寄留者であることを覚えましょう(ヘブル11・13)。自分とその生涯を主にささげ、委ねられたものを大胆に主のためにささげて用いていきましょう。神にささげられた自己とその生涯こそ神が喜ばれるささげものなのです。



## 研究資料

(小平徳行)

やもめの献金の場面である。この出来事の直前の段落は、イエスが律法学者について語っているところで、彼らは厳しいさばきを受けるべき者であった。彼らは「見えのために長い祈をする」(20・47)と言われているように、人に見られるために義を行う偽善者であった。しかし、このやもめは対照的に、人々からは評価されない献金をした。レプタ二つが、やもめにとつてどのような意味を持っているのかは、人々には隠されていたのである。その隠れた事を見ておられたのがイエスであった。

## テキスト

**1 さいせん箱** この時代のユダヤのさいせん箱は箱にトランペット状の口がついたもので、それが神殿の「婦人の庭」(ここまではユダヤ人の婦人も入ることができた)に13箱置かれていた。それぞれの箱には、札が付いていて目的別に区分けされていた。ささげる人は、自分の名前と何のためにささげるかを言つてささげ、箱の脇には神殿を管理している祭司が帳面のような物をもつて

立っており、誰がいくら献金したかを言つて記帳した。イエスは金持ちたちが見栄のために献金して得意になっていることに心を痛めておられた。献金<sup>[ギ]</sup>ドーラ 義務としてではなく自発的なささげ物を指す。見られ マルコでは座つて見ておられたことを伝えている。座ることは審判者として權威の座に着くことを連想させる。イエスはここでなされるすべての行為を見抜き、正しくさばかれるお方である。

**2 貧しい<sup>[ギ]</sup>ベニ克蘭** この語はルカが通常用いておらず、新約聖書でもここだけにしか用いられていない。やもめの貧しい状態を強調しているのであろう。律法学者たちが、やもめの家を食い倒していたことも、やもめの貧しさの一因であった(20・47)。やもめは一世紀のユダヤにおいてお金を稼ぐ方法がほとんどなく、教会はやもめを助ける義務があった(使徒6・1、1テモテ5・16、ヤコブ1・27)。レプタ二つ これは極めて少額であった。「レプタ」は「小さい、薄い」の意味。レプタは最少額の銅貨で、2レプタは1デナリの64分の1であり、ローマの貨幣では1コドラントに相当する(マルコ12・42)。1コドラントは当時ローマの銭湯一回の入浴



料であった。タルムードによると2レプタは特別な場合を除いて、献金に課せられた最低額であった。

**3〜4 よく聞きなさい** 直訳すると「わたしは真実をあなたがたに言う」となる。他の人からはだれからも目を留められることのないやもめの小さな行為に対して、主はそれを厳粛な事として語られた。**だれよりもたくさん入れたのだ** イエスの言葉を文字通り訳すならば「(他の) だれよりも多く」ではなく「(他の) すべて(人々のささげものを合わせた分) よりも多く」となる。イエスはささげ物において金銭的な価値がすべてではない事を示している。大事なのは、ささげた量ではなく自分のために確保した量である。もしも基準が、ささげた後にどれほど残っているかということであれば、やもめは確かに、他の金持ちたちにはるかに勝って多くささげたとと言える。なぜなら金持ちたちはあり余る中からささげたので、たくさん手元に残っていたが、やもめは乏しい中から持っているすべてをささげたからである。これこそ真のささげものである。**持っている生活費全部** イエスはこれが彼女の全生活費であることを知っておられた。彼女は自分の明日の生活を守ってくださる神の愛の

配慮に対する信頼があつたのであろう。これは自暴自棄や悲壮感から行なつたことではなく、神への献身の思いから喜んでなされたことである。ささげることは信仰に直結している。この心からの献身的なささげものは、どんなに少額であつても神の御前に尊いのである。

このやもめの行為は、隠れたことを見ておられる神の前でなされたことであつたが、このささげものの意味をイエスが弟子たちに明らかにした。後に、ベタニヤで一人の女性が高価なナルドの香油をイエスに注ぎかけた時も、その行為の意味を明らかにされたのはイエスであつた。イエスは人間の行為一つ一つにおいて、目に見える所だけでなく、その人の背景も、その心もすべてをご存知の上で正しく評価してくださるのである。

**参考図書** 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』、神原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解』(以上いのちのことう社)、『The IVP Bible Background Commentary: NT, Leon Morris Luke (The Tyndale New Testament Commentaries)』など。

## 聖書

ルカ 21・1～4

## タイトル

神様に喜ばれる献げものって？

## 暗唱聖句

あの貧しいやもめはだれよりもたくさん入れたのだ。  
ルカ21・3

## 目標

すべてをご存じの神に喜ばれる献げ物をする。

## 導入

(和田 治)

2年生のはるみちゃんは、教会学校の礼拝の中の、『献金』の時間が大好き！「わたしをこんなにも愛していてくださる神様に、心を込めてささげるの。」今日も、献金の時間になりました。回ってきた袋に入れようとして、ぼろっと10円玉一枚落ちたのです。おさむ君が叫びました。「あー、はるみちゃんの献金、たった10円だつてえー、すつくなーい！」はるみちゃんは悲しくなつて泣き出しました。だって、ほんの少しのおこずかいの中から、感謝を込めてせいっぱいの献げものをしたんですもの。その後、教会学校の先生が、おさむ君に「献金」の意味を教えてくださいました、ちょうど今日の聖書の箇所から。献金の意味がよくわかつたおさむ君は、言いました。「はるみちゃん、ごめんね。これから、ぼくもはるみちゃんのように、

心から感謝を込めて献金しようと思うんだ。」みんなは、どんな気持ちで献金をしているかな？今日は、神様に喜ばれる献げものってどんなのか、いっしょに学びましょう。

## 金持ちの献げものと、貧しいやもめの献げもの

さて、宮の中でのことです。イエス様は、金持ちたちが次々と献金箱にお金を投げ込む様子を見ておられました。箱の上には、金属でできたラッパのような形の献金口がついていました。「チャリチャリン！ジャラジャラジャラ、カンカーン！」ある金持ちが大きな音を立てました。思わずみんなが注目。「おおー！あの人はずごくたくさんの献金を投げ入れたぞー」。お金持ちたちは、こんなふうに献金するのが大好き！だって、周りの人たちが感心してくれるんですもの。

と、そこへ貧しい身なりの女の人がやつてきました。「やもめ」といつて、夫がすでに死んでしまつて、残された女性です。その頃、やもめはみんなとつても貧しかったのですね。彼女はレプタ二つ、今のお金でいえば、十円玉を二個、そつと投げ入れました。それは、これ以上安い献金は受け付けられません、と決められた、ぎりぎりの額だったのです。「ふん！恥知らずなやつだ。あんなちよつぱりの献金、よくやるよ、まつたく！」バカにする人の声が聞こえてきます…。

## 献げる人のすべてを知っておられたイエス様

ところが、イエス様がおっしゃいました。「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れたのですよ。」え？ たったのレプタ二つなのに？あの金持ちよりも？どうして？イエス様は続いてこうおっしゃったのです。「ほかの人たちはあり余る中からほんのわずかなだけ献げたのに、この女は乏しい中から持っている全部を献げたからです」。さすがイエス様！いくら献げたか、よりも、どれだけ残っているのか、どんな思いで献げたのか、ちゃんと知っていてくださったのですね。

## 神様に喜ばれる献げもの

このやもめが献げた「レプタ二つ」のように、本当に神様に喜ばれる献げものって…？

1「神様、ありがとう！」 私たちが生きるために必要なもの、たとえば、食べ物や着るもの、学校やお店、そして僕たち私たち自身も、全部ぜんぶもともとは神様からいただいたものですよね。それを思えば、もう、心いっぱい『ありがとう！』って伝えずにはおられませんよね。その心がこもった献げものこそ、神様に喜ばれるのです。

2「神様、信じます！」 やもめは生活のためのお金を全部献げました。神様が守ってくださるって信じていたからです。私

たちも神様を心から信じて献げるなら、本当に喜ばれるのです。

3「神様、僕を、私を献げます！」 やもめが献げたのは、実は自分自身でした。「神様、私を献げます。どうかいい者ですが、お使いください！」って。献金について書かれている聖書の箇所、こうあります。「自分自身をまず、神のみこころにしたがって、主にささげ…」（Ⅱコリント8・5）。つまり、献金は、本当は、自分自身を献げるしるしなのです。でもこれは、「イエス様が僕の、私の身代わりにどれほど苦しんで下さったか」が分からなければ、絶対にできません。今、もう一度イエス様の十字架を思い巡らしてみよう…。そして、すべてを献げて僕を、私を愛してくださいとお方の愛に応えましょう！

## 結論

献金は神様への感謝、信頼、献身です。今日学んだことを胸に、心から、精いっぱい献げましょう！額が多ろうと少なからうと、もし、神様に感謝しながら、信じて、献身の思いを込めて献げるなら、必ず神様は喜びくださいます。はるみちゃん、の献げた献金のようにね…！

♪今こそキリストの愛に応えて♪

（福岡教会 田中英昭兄作詞作曲）

聖書  
テーマルカ22・14～23  
晩餐の恵み

## 序論

(高橋頼男)

主イエスは、弟子たちと共に食卓に着かれて最初に、「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過ぎ越しの食事しようと、切に望んでいた」と言われました。主の思いが披瀝ひれきされたこのことばに、主がそのご生涯の最後に弟子たちと共に過ごす晩餐ばんさんをどれほど切実に願われていたことが明らかです。これは、誰にも知られないうちに準備された過ぎ越しの食事でした。ユダにも敵たちにも知られてはいけなかったので、主は細心の注意を払って秘密裏に場所を備えられました(22・7～13)。そのようにして主は弟子たちと共に最後の過ぎ越しの食卓を囲まれました。もう、来年の過ぎ越しにイエスはおられません。もう、二度とこの地上において弟子たちと共に過ぎ越しの食事をされることはないのです。主はこの最後の晩餐で「主の聖餐せいさん」を制定されました。

## 一、過ぎ越しといつて背景(22・7～8)

かつてエジプトを脱出する時、家々の中で小羊が取られ、ほふられ、過ぎ越しの食事がなされました。それを再現し主

の救いを記念する過ぎ越しの祭りが主の贖あがないの背景にありました。この時、ユダヤ人である民の誰もが、大いなる救いの出来事を思い起こし、神の贖あがないのみわざを新たにしました。イエスはこの祭りの中で、ご自身の十字架における死がどういう意味をもっているのかを明らかにされたのです。弟子たちは過ぎ越しについて、いけにえの儀式や契約について知識がありましたから、主が語られるご自分の死の深い意味を悟ることができたのです。このように、主は、ご自分の受難の死とその意味を教えるため過ぎ越しの祭りの中の最後の晩餐を行われました。

## 一、パンを取って(19)

食事の時は「パンを取り、みんなの前で神に感謝し、それをさいて食べ」ました(使徒27・35)。そのようにしてこの特別な食事もなされました。ただ、この聖餐の場合、一つのパンが裂かれ、皆に分け与えられました。それは「主が裂いて、弟子たちに分けて与えられ」たのです。一つのパンをちぎって皆に分け与えることは、それを食する者たちの一体性を意味します。「パンが一つであるから、わたしたちは多くいても、一つのからだなのである。みんなの者が一つのパンを共にいただくからである」(1コリント10・17)。

また、主はパンの奇跡を行われ、5千人の給食をふるまわれた後に、「わたしは命のパンである」「わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう。わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である」(ヨハネ6・48、51)と言われました。今も生きておられ、いのちのパンとして私たちを養われるイエスを記念して聖餐式を行うのです。

## 二、私の血によるあたらしい契約(20)

パンを裂いて食べ、そして食事をなし終えて後、改めて杯(過ぎ越しの食事の第三の杯、祝福の杯)(1コリント10・16)を取られたイエスは、「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である」と言われました。昔は契約を結ぶ時、両者が切り裂かれた獣の間を通り(血の契約)、あるいは、両者に血が注がれることにより(血の血 出エジプト24・6～8)、契約が厳粛に結ばれたのです。しかし、新しい契約はイエスだけの一方的な恵み(私たちにおいては、命を捨てず血も流さないで、ただ契約の祝福にだけ与るというまさに恵み)による契約なのです。これこそ新しい契約、「新契約」でした。これは時間的に新しいというだけでなく、その内容において優れていて新しいもので

す。それは、この新契約に与る者は、神の律法が石の板に刻まれるのではなく各自の心の中に刻まれ、神と自由な交わりの中に生かされるということです。

神は、イエスの血に与る私たちを、このような新しい契約の中に招き入れてくださるのです。

## 三、主の晩餐の恵み(1コリント11・23～25)

聖餐式は、このようなイエスの死の意味を教え続け、また私たちが覚え続けるためにイエスご自身が定められました。この聖餐式を通して、私たちはイエスご自身を記念し、生ける復活のキリストと交わり、キリストとの一体を確認していきます。また、ここで一つのパンを裂き一つの杯から飲むことを通して、お互いがキリストにあつて一体であることを確認していくのです。そして、繰り返しこのような聖餐に与ることを通して、私たちは、キリストの体である教会を建て上げていくのです。

## 結論

主がその聖餐の中に与えられた一つ一つの意味を新たに確認し、これにふさわしく聖餐式に与り、その恵みを豊かにされましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

最後の晩餐<sup>ばんさん</sup>の場面である。この時、過ぎ越しの食事がなされ、その後、聖餐<sup>せいさん</sup>の制定がなされた。過ぎ越し祭は、世の罪を取り除く神の小羊としてほふられたキリストを予表するものであった。イエスはここで、ご自身の死によって過ぎ越しの食事は成就し、聖餐に置き換えられ、古い契約から新しい契約に移行することを教えている。

## テキスト

14 時間になったので 過ぎ越しの食事の開始時刻は日没後であった。この時期のエルサレムは午後六時ごろまでには日没となる。席についた<sup>[キ]</sup>アネペセン は直訳すると「横たわった」となる。過ぎ越しの食事の時には、昔は立つてなされたが(出エジプト12・11)、この時代には正式な会食の時は、左わき腹を下にし、右手を自由に使えるようにして、横になって行われていた。過ぎ越しの食事は家族するのが普通であったが、巡礼者たちは仲間同士集まって会食した。

15 過ぎ越しの食事の時、家長は子どもたちの問いに答えて、祭りと食事の意味を教える定めになっていたように

に(出エジプト12・26く27)、イエスはここで、ご自身の死の意義を教えている。切に望んでいた この過ぎ越しの食事はイエスが最後の晩餐として選んだもので、翌日に迫るご自身の死を記念させるために聖餐を制定し、最後の訓戒(ヨハネ13く17章)を与えるためであった。これは、当時の弟子たちだけでなく、後のすべての人々にとって重要な意味を持つものであるゆえ、この時を切に願われたのである。

16 神の国で過越が成就する時 これは神の国の完成の時のこと、終末における祝宴を指し(イザヤ25・6)、18節の「神の国が来る」時と同義。わたしは二度と、この過越の食事をするのではない この晩餐が最後の過ぎ越しの食事であることを意味する。過ぎ越しの食事はイエスの十字架による贖い<sup>あがな</sup>によって、聖餐に移行し、主が再び来られる時まで行われる。また、ここでイエスは、神の国が主の再臨と共に到来する時まで、教会のために戦われることを示唆している。

17 そして杯を取り 過ぎ越しの食事では、杯が4度回される。この杯はそれらのうちの一つである。杯<sup>[キ]</sup>ポテリーオン 単数形が使われており(20節も同じ)、イエス



の契約にあずかる一つの共同体であることを示唆している。感謝して[ギ]ユーカリステサス 聖餐を表わす術語「ユーカリスト」は、ここから来ている。

19〜20 パンを取り このパンは過ぎ越しの食事の種なしパンである（出エジプト12・15）。これをさき イエスは一つのパンをさかれた。これはイエスのからだだが十字架上で裂かれることを表わしている。これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである このパンは私たちの身代わりとなって裂かれたキリストのからだを意味している。このように行いなさい これは現在時制である。この時制は動作の反復、継続を表わすため「行い続けなさい」という意味になる。あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である 契約はいけにえの血によって結ばれた（出エジプト24・8、ヘブル9・20等）。イエスは神がイスラエルと結ばれた古い契約を破棄され、御国の民と新しい契約をご自身の血によって結ばれたのである。神は過ぎ越しの小羊の血によってエジプトからご自身の民を贖ったように、血が流されなければ神と民との間に罪の赦しの約束は成立しない（ヘブル9・22）。このようないけにえになることが

できるのは、罪がなく、まことの人間となつてくださつたイエス・キリストのみである。

21 わたしを裏切る者が、わたしと一緒に食卓に手置いていゝる 一緒に食事することは親密な関係を表わす。ここではイエスにもてなされている者の中に裏切る者がいるということが強調されており、詩篇41・9の成就である。またこれは犯人を名指しする事を避ける配慮がなされた表現である。

22 わざわいである[ギ]ウーアイ 「ああ！」という嘆きの言葉。ご自身の死が神によって定められていることを述べた直後に、それを成就する役割を果たす人物に対する嘆きである。これは呪いに使われる言葉であるが、ここではあわれみをも表わしている。しかし、神に定められた事であつたとしても、裏切る者の責任が問われないのではない。マルコによる福音書ではユダについて「生れなかつた方が、彼のためによかつたであろう」（14・21）と言われている。聖書においては神の主権と人間の自由意志は決して矛盾するものでなく、相補的なものとしてとらえられている。

参考図書 2月10日分と同じ。



聖書  
タイトル  
暗唱聖句

ルカ 22・14～23

大切なだね、聖餐式つて！

これは、あなたがたのために与えるわたしの中からである。

ルカ22・19

## 目 標

聖餐の恵みを覚え、キリストの十字架による贖いの恵みを覚えて生きる。

## 導入

(和田 治)

あと一か月くらいたつと、皆さんが通っている幼稚園や小学校で、「卒園式」や「卒業式」がありますね。皆さんの人生の中で、とても大切な式ですよ！でも、実はもっともずっと大切な式が、教会の礼拝で毎月（あるいは不定期に？）行われているんですよ。知っていましたか？パンを食べ、ぶどう酒（又は、ジュース）を飲む式です。「聖餐式」って言います。「洗礼式」と共に、キリスト教会で一番大切にされてきた式なんです。さあ、今日は、「聖餐式」が定められた時のことを学びましょう。

## 最後の晩餐

「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過ぎ越しの食事をしたい、と心から願っていました」。イエス様がしじみみと弟子たちに語りかけます。そう、もう間もなく、イエス様は

十字架にかけられて殺されてしまうのです！過ぎ越しの食事が始まりました。もう千年以上も前からずっと毎年守られてきた大切な食事です。かつてエジプトで奴隸として苦しんでいた民を、神様が救い出してくださるときのことです…。それぞれの家で小羊を殺し、その血をかもいに塗れば、主はその家を過ぎ越ししてくださる…。でも、血が塗られていない家は、その初子が撃たれる…。エジプト中の全ての家で、初子が撃たれましたよね…。でも、イスラエルの民の家では、初子が撃たれることはありませんでした。身代わりに小羊が殺されたからです。

実は、身代わりに殺された小羊は、やがて来られる救い主を表していたのです。「まさにその小羊が私なのだ！」そのことがはっきり分かるように、イエス様はこの食事を弟子たちと共になさいました。

## パンに込められた意味

過ぎ越しの食事に続いて、イエス様は改めて一つのパンを手に取りました。神様に感謝をささげ、それをちぎって、弟子たち一人一人に分け与えられました。皆が一つなのだ、という意味を込めて。そして、「これはあなたがたと与える私の体です。これを食べ、私を心に深く覚えるのですよ」と言われたのです。以前にイエス様は、五つのパンと二匹の魚で、男だけで五千人の人々を

満腹になさった後、こう言われたことがあります。「わたしは、天から下って来た、いのちのパンです。このパンを食べる人はだれでも、永遠に生きます。このパンは、世界の人々の救いのためにささげる、わたしの体なのです」(ヨハネ6・51より)と。そうです、イエス様は今も生きておられる、命のパンなのです。

### ぶどう酒に込められた意味

続いてイエス様は、杯を弟子たちに渡して言われました。「このぶどう酒は、神様があなたがたを救ってくださったという新しい約束のしるしとなるものです。つまり、あなたがたのたましいを買い戻すために、わたしが流す血の代わりなのです」と。昔は大事な約束をする時、そのどちらかが、切り裂かれて血まみれになった獣の間を通りました。あるいは、どちらにも血がふりかけられたりもしました。約束をする両者が、それぞれに役割を果たします。でも、イエス様がここで弟子たちに渡された杯によって結ばれた新しい約束は、イエス様だけが血を流す一方的なものでした。弟子たちも、そして私たちも、血を流したり、何かの役割を果たす必要がありません。何の代価も払わずに、十字架で血を流してくださるイエス様の命に、あずかることができるのです。

### 聖餐式に込められた意味

皆さん、聖餐式は、このときイエス様がパンとぶどう酒に込め

られた意味を、私たちがずっと忘れないで心に留めるためにあるのです。

イエス様によって、私たちは一つです！

イエス様は命のパンです！

イエス様は血を流し、命をかけて、神様と私たちの間の新しい約束を結んでくださいました。その約束は、「神様の戒めを守りなさい。そうしたら救ってあげましょう」というものではありません。どんなに頑張っても神様に喜ばれるきよい生き方ができない私たちの心に、イエス様が来てくださるのです。死を打ち破ってよみがえられ、今も生きておられるお方が、私たちのうちに住んでくださるのです！そして、きよい生き方ができるように、力を与え続けてくださるのです。これが新しい約束です！

### やがてイエス様とお会いするまで

このようなとっても大切な聖餐式を、いつまで続けるのでしょうか？やがて再びイエス様が来られる日までです。それまですつと、聖餐式によって、繰り返し繰り返し、イエス様の十字架の愛を深く思いながら歩むのです！イエス様を信じて、良い時に洗礼を受けて、聖餐式にあずかりましょう。そしてますます、イエス様の愛に満たされましょう。

♪赦すためです♪

(友よ歌おう42)

# 聖書 テーマ ルカ22・39、46 十字架に向かう祈り

序論

(高橋頼男)

この箇所はゲツセマネの祈りです。主は十字架にかかる直前の数時間、お一人で祈る時を持たれました。

最後の晩餐を終えられたイエスは、弟子たちと共に「いつものように、いつもの場所に、祈るために」行かれました。イエスがエルサレム滞在中は、いつもこの場所を祈りの場としておられたのです。ゲツセマネに着くと弟子たちに祈るよう命じられ、ご自身は少し離れたところに行き、一人で祈り始められました。

この時のイエスの祈りはいつもとは全く違う祈りでした。「汗が血のしたたりのように地に落ちた」とあるように、祈りにおいて苦闘するイエスの御姿が出て来ます。天から御使いが現れてこの祈りを支えました。イエスはこの祈りの中で、十字架を負われました。

ゲツセマネの祈りを通して、祈りとは何であるかを教えられるます。

## 一、苦しみの祈り

祈りは慰めであり、力を受ける時であり、楽しいものです(新聖歌190)。しかし、時に祈りは苦しみを伴います。私たちは困難に直面し、問題を抱えているとき真剣な祈り、苦しみの祈りをします。

ゲツセマネの祈りは、単なる苦しみを越えた壮絶な祈りです。「イエスは苦しみもたえて、ますます切に祈られた」(その汗が血のしたたりのように地に落ちた)とあります。苦しみもたえては、死の恐れを表現するものです。主は立つておられないほど困惑し、恐れ、ひざまずき、ひれ伏し祈られました。なぜ、これほどまでに死を恐れられたのでしょうか。その理由は、ご自分がこれから架かられる十字架の出来事がどのようなものであるかをよくよく知っておられたからです。全世界の罪を聖い神の御子が全身で負われるのです。そのことにより、今まで経験されたことのない父なる神との断絶が起ころうとしているのです。他の誰も味あうことのない苦しみです。罪のない神の御子が、罪人として十字架に向かって進んで行かれるお苦しみです。いくら人が言葉を尽くして説明してもその御苦しみとそのおこころを伝えることは出来ません。イエスは私たちの身代わりとなって苦しみもた

え、死んでくださいました。そして、これ以上ないほどの苦しみの祈りをされました。

私たちも時に苦しい祈りをし、心の痛みを覚え、重荷に耐えかねて主の前にひれ伏すことがあるかもしれません。その時、イエスが私のためになされたゲツセマネの祈りを覚えましょう。

「彼は、…十字架を忍び、神の御座の右に坐するに至ったのである。あなたがたは、弱り果てて意気そそぐしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである」(ヘブル12・2～4)。

## 二、神への服従の祈り

イエスは、この苦しみの祈りという試みを、父なる神への服従を通して勝利されました。

この祈りの重要な点は、〈父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください〉にあります。祈る時、神様への願いを何でもありのまま言い表すことは良いことです。しかし、イエスは〈この杯をわたしから取りのけてください〉と願われながら、さらに〈わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください〉と祈られ

ました。この時、イエスは、父なる神に従うか否かを、ご自分のいのちをかける形で問われておられたのです。もし、父のみこころに従うなら、イエスは黄泉に下ることを選び取り、み父との断絶を経験されるのです。それでも人間の贖い<sup>あがな</sup>のために、あえて苦しみの道を選ばれたのがゲツセマネの祈りです。イエスは同じ祈りを三度も繰り返されたではありません。祈りの重点が、わが思いから、みこころへと変えられていく、服従への祈りでした。

「キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙をもつて、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈りと願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである。彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び」(ヘブル5・7～8)。

ゲツセマネの祈りは、御子が御父への完全な服従を試みられた時でした。そして、服従こそ勝利の秘訣だったのです。

## 結論

私たちも時に困難に直面したり、大きな問題の中で苦しみを伴う祈りをしなければならぬことがあります。このような祈りは、神様への完全な服従が試されています。そこで、神のみこころを選ぶことこそ勝利であることを覚えましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

ゲツセマネの祈りである。これは十字架の苦悩を先取りしたもので、贖いのわざにおいて不可欠なものであった。この祈りにおいて勝利が決定したと言える重要な場面である。ここから私たちは、従うこと、祈ることを学ぶことができる。イエスの祈りの姿勢は、ご自身が祈りについて教えられた事をそのまま実践して見せてくださったっている。

マタイとマルコの並行記事と比べると、本福音書では物語を短縮して、イエスの祈りの言葉は一回目だけ記されている。またイエスがペテロ、ヤコブ、ヨハネを選んで連れ行つたことも記していない。そして、弟子たちの失敗よりもイエスの祈りを強調している。

## テキスト

**39** **いつものように** 受難週の時だけでなく、その他の時も、この場所で夜、祈ることはイエスの習慣だった。**オリブ山** マタイやマルコは、ここがゲツセマネであることを伝えている。ゲツセマネはオリブ山の西斜面のふもとにある園である。ルカは「ゲツセマネ」という名が異邦人には

なじみがないために使わなかったのかもしれない。

**40** **誘惑に陥らないように** これは、イエスが捕えられた後に、イスラエルの指導者たちが弟子たちに憎しみを向ける時にイエスを裏切るという誘惑に陥らないようにということであろう。

**41** **石を投げてとどくほど離れたところへ退き** これは近からず遠からずの距離で（30〜40mと推測される）、イエスは弟子たちを離れてひとりになって祈られた。ここは他の誰も近づくことのできない御父と御子だけの祈りの場であった。**ひざまずいて** 当時の習慣では、立つて目を天に向けて祈っていた。しかし、この時、特別に重大な時を迎え、苦しみの伴う祈りであったため、ひざまずいて祈ったのであろう。これは最も心砕かれた祈りの姿である。

**42** **父よ[キ]パテール** 主の祈りで教えられたように、御父に親しく呼びかけている。マルコでは「アバ」という幼子の呼びかけの言葉が加わっている（14・36）。**杯** 聖書においては特に苦難や神の怒り、審判を表わす比喻として用いられている。（詩篇11・6、イザヤ51・17、エゼキエル23・33）。**わたしの思いではなく** これはイエスの意思と御父のみこころとが対立していることを意味しているので

はなく、神のみこころが成ることを強く願っていることを表わしている。**みこころが成るようにしてください**。これは主の祈りの第3祈願に等しい。これは形式的に安易に唱えられる祈りではない。神のみこころに自らを明け渡すことが伴う。これは誘惑に際して、悪魔の策略に陥らないためにも必要なことである。

**43 御使が天からあらわれてイエスを力づけた** ここはルカ独特の記述。弟子たちはイエスを力づけることはできなかった。この激しい戦いには御使いの助けが必要であった。

**44 苦しみもだえて**<sup>[キ]</sup>**アゴニア** 新約聖書ではここだけに使われている。この苦しみ、恐れは、これから受けようとしておられる十字架による死が、肉体的な死だけでなく、霊的な死を意味していたためである。霊的な死とは神との分離であり、神に見捨てられることである。神の怒りに直面する必要のないお方が、すべての人に注がれようとしている神の怒りを一心に引き受けようとしていたのである。神の怒りの何たるかを知らない私たちには知ることのできない苦しみであった。**ますます切に祈られた** イエスは苦しみの中になお祈り続けられた。マタイやマルコでは3度祈られた事が記されており、苦闘の祈りであった。このゲ

ツセマネの苦しみを通して、イエスは従順を学ばれ（ヘブル5・8）、勝利して立ち上がることができたのである。**汗が血のしたたりのように地に落ちた** 異常なほどの汗の出かたであった。

**45 祈を終えて立ちあがり** イエスはサタンに勝利し、神のご計画に全面的に服された。祈るべき時は終わり、立ちあがるべき時が来たのである。**彼らが悲しみのはて寝入っている** 弟子たちは祈りの支援者として期待されたが、それに応えることができなかった。彼らは肉体的に疲れていただけでなく、悲しみのあまり、己に打ち勝つことができずに眠ってしまった。悲しみが極まると人間の精神はまどろんでしまい、人を祈れなくさしてしまうものである。

**46 誘惑** 荒野の「試み」（ルカ4・2）と同語であり、この時のイエスの体験は荒野の誘惑と同種の霊的な戦いであったことを思わせる。このゲツセマネの祈りは弟子たちの理解を越えたメシヤだけの体験であり、御使いの助けを受けて悪魔と対決した霊界の大激闘であった。

参考図書 2月10日分と同じ。

## 聖書

## タイトル

## 暗唱聖句

ルカ22・39～46

どんなのかな？ イエス様の祈りって…  
しかし、わたしの思いではなく、みこ  
ころが成るようになしてください。

ルカ22・42

## 目標

祈りの中で神の御心を選び取る者とな  
る。

## 導入

(和田 治)

みなさんにとって、一番楽しい時って、どんな時ですか？おや  
つ時の時？ゲームをしている時？家族とテレビを見ている時かな？  
賛美の歌の中に、「ああくなんて楽しいんですよ、静かな祈り  
の時って！」という意味の歌があるんですよ（新聖歌190）。そう  
なんです！神様と親しくなればなるほど、お祈りの時間が、もう、  
幸せいくつばいで楽しい時間になるんですよ、ハレルヤーそして、  
私たちの祈りのお手本は、何と言ってもイエス様ですよ。

ところが、今日の聖書の箇所のイエス様のお祈りのご様子は、  
それまでのイエス様とは別人のよう…。いったいイエス様、どう  
なっちゃったのかな？って思うくらい！一緒に見てみようね…。

## 苦しみと悲しみの中での祈り

先週学んだ、最後の晩餐<sup>ばんさん</sup>、そして聖餐式<sup>せいさんしき</sup>の後、イエス様は弟子  
たちと一緒に部屋を出て、いつものようにオリブ山のゲツセマ  
ネに行かれました。「僕は、私は、いつもここで祈りするんだ」  
っていう場所が、皆さんにはありますか？イエス様はいつもここ  
でお祈りしておられたのですね。

「誘惑に負けないように、神様に祈りなさい。」そうおっしゃっ  
て、イエス様は、石を投げれば届くあたりまで歩いて行きました。

「うぐぐうぐ…、おおく…！」ひざまずいて祈り始められた  
イエス様は、間もなくうめき声をあげました。息が荒く、はあは  
あと苦しそうです…。お顔は悲しみに満ち、ゆがんでいます！苦  
しみ悶え<sup>もた</sup>ながら、力を込めて必死にお祈りなさるイエス様…。そ  
のお姿は、父なる神様との親しいお交わりを楽しみながら祈って  
来られたイエス様とは別人のようです！やがて、大粒の汗が、ま  
るで血のしずくのように、したり落ちました。イエス様、なん  
て苦しうなんでしょう！

## ありのままの祈り

イエス様の祈りのお言葉が聞こえてきました。

「父よ。許していただけるなら、どうぞこの恐ろしい杯を取り  
除いてください！」



「杯」…それは、もう間もなくイエス様が捕えられ、拷問を受け、十字架にはりつけにされ、殺されていく苦しみのことなのです。イエス様はこれから起ころうとするすべてを知っておられました。十字架は、特別に悪いことをした犯罪人を、これ以上苦しめることはできないという方法で処刑するための道具でした。そのあまりの痛さ、恥ずかしさ、苦しさのために、後に禁止されたほどの死刑なのです。そして何よりも、父なる神様から見捨てられてしまうのです。何の罪もない神のひとり子イエス様が、そんな苦しみの中で殺されるなんて…それは、私たち一人一人の、そして世界中のすべての人の罪を背負って、身代わりに罰を受けるためでした。そのことをよくわかっておられたイエス様、幾度も弟子たちに、十字架の預言をなさったイエス様…。でも、目の前に迫った恐ろしい死の苦しみを思い、ありのまま、お心のままを祈られたのです！

### みこころが成るよこに

続いてイエス様が祈られたお言葉、それは、こうでした。「しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」。そうです、イエス様はご存知でした、すべてに優って父なる神様のみこころだけになるべきことを。そして、それこそが、もっとも良い道であることを。ですから、ご自分の思い通りになることを願わず、すべてを父なる神様のお心にお任せになったのです。

皆さんは、神様の御心こそが、どんな時でも、どんな場合でも、必ずベスト、一番だってことを知っていますか？先の先まで知り尽くしておられる神様は、神様を信じてお任せするすべての人に、ベストをしてくださいます。たとえそれがどんなに苦しくつらく感じられることであっても、です。イエス様も、十字架にかかれ、死なれましたが、だからこそ、三日目によりみがえらされ、救いの道をお開きになったのです。罪に対する、死に対する、完全な勝利を収められたのです！十字架の苦しみは、それで終わってしまふものでは決してありませんでした。その先にある栄光こそ、つながっていたのです！

### まとめ

私たちも、イエス様のように、ありのまま、心のままをお祈りしましょう。何の遠慮もいらないのです。心にある心配や悲しみや不満を、包み隠さず祈ってよいのです。ただ、忘れないでください、続いて「ですが、わたしの思いどおりではなく、あなたのお心のままになさってください」と祈ることを！それが、イエス様が命をかけて示してください、神様に喜ばれる本当の祈りなのです。神様の御心と自分の思いが違っている時、神様の御心を選び取る、これが祝福の秘訣なのです！

♪祈りつづける♪

(教会学校さんびか69)

# 聖書 テーマ ルカ22・31〜34、54〜62 キリストのまなざし

## 序論

(金井信生)

イエスがゲッセマネの園で捕らえられて、大祭司の邸宅に連れて行かれた時、ペテロは遠くからついて行きました。しかし、人々にとがめられた時、ペテロは三度、イエスとの関係を否定しました。その時、主は振り向いてペテロを見つめられます。ペテロは主のまなざしに、自分の傲慢さも弱さもすべて見抜かれていたことと、そんな者になお目をとめてくださっているありがたさに、激しく泣くばかりでした。

## 一、愛に満ちたまなざし

イエスはご自身の受けられる苦難について、弟子たちにあらかじめ告げられました。さらにペテロには「あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」とおっしゃられました。

ペテロは、自分の信仰がなくなるという主のお言葉を心外に思い、「わたしは獄にでも、また死に至るまでも、

あなたとご一緒に行く覚悟です」と、決意をあらわします。しかし、結果は、イエスの言われたとおりになってしまいました。

ペテロの人物について、イエスは初めから見つめてこられました。

最初、兄弟のアンデレによってペテロはイエスのもとに導かれました。その時、「イエスは彼に目をとめて言われた、『あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケバ(訳せば、ペテロ)と呼ぶことにする』」(ヨハネ1・42)と。シモン(小石)をペテロ(山岩)とする、これからペテロが導かれていく姿を、初めからお示しになられました。

また、イエスが水の上を歩いて近づかれた時、ペテロはイエスに願って自分も水の上を渡らせてくださいと願いました。イエスはこれを許し、水の上を歩きはじめたペテロをじつと見ておられました。そしてペテロが風を見て恐ろしくなり、おぼれかけると、「すぐに手を伸ばし、彼をつかまえて」(マタイ14・31)くださいました。

ペテロが自分で知る以上に、イエスはペテロの言葉や振る舞い、何よりも心を見つめておられました。

## 二、信じぬくまなざし

イエスが告げる「あなたは三度わたしを知らないと言う」という言葉に、ペテロの答えはありませんでした。〈きよう、鶏が鳴くまでに三度〉と、あまりにも具体的な言葉を受け止めきれなかったのではないでしょう。鶏が鳴いたとき、ペテロは、まさかと思っていたことがその通り起こったことを知りました。イエスから離れることも否定することもあり得ないと自分を信じていたのに、人を恐れて、〈知らない：ちがう：わからない〉と、徹底的にイエスとの関わりを否定してしまいました。さらに、〈遠くからついていった〉はずなのに、ペテロのこの失態を、〈主は振り向いてペテロをみつめられた〉のです。

もしこの時の主のまなざしに、「やっぱりやってしまったか、やると思った」という思いがこもっていたら、ペテロは立ち直れなかったことでしょう。しかしイエスのまなざしは、〈わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った〉という、もう一つの言葉を思い出させました。嵐の中で信仰は弱くなるかもしれませんが、自分では保てなくなるかもしれません。しかし、

そんな私たちを主が信じ、支えてくださっているのです。

## 三、希望に立つまなざし

イエスはペテロに、〈あなたが立ち直った時には、兄弟たちを力づけてやりなさい〉と命じておられました。聞いた時には何のことか、ペテロにはわからなかったかもしれませんが。しかし今はわかります。イエスは私たちの失望や絶望さえも越えて、恵みによって再び主の恵みに生きる者となることを望み続けてくださっていました。信仰者も、大きな試練に対して無力です。失敗することもあります。その時に、弱いんだからしょうがないと傷をなめあうのではありません。主に愛され、信じ支えられてきた経験を分かち合い、主によって結ばれている交わりの中で互いに慰め、励まし合いながら、主に従っていく幸いがあるのです。

## 結論

主は私たちのすべてを知っておられます。主のまなざしの中にいつも自分をおいて、弱さの中にも赦しと回復を与えられる幸いに生きましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

ペテロの否認は四福音書すべてに取りあげられているが、ルカだけがイエスのペテロに対するとりなしについて記している。イエスはペテロが否認することだけでなく、その後に立ち直って、兄弟たちを励ます者としての役割を果たすことを見通しておられた。

## テキスト

**31 シモン、シモン** 二度名前を呼ぶのは特別の感情の表れである（ルカ10・41、使徒9・4、創世記22・11）。**サタンは…願って許された** サタンはヘブル語から来ており「敵対者」「訴える者」の意。サタンがもたらすことのできる試練や誘惑は神に許されたものだけである（ヨブ1〜2章参照）。**あなたがた イエスのすべての弟子たちのこと 麦のようにふるいにかける** 麦をふるいにかけるのは、もみがらなどをあおぎ除くためである。ここでは、大きな試練によって信仰がなくなるほどに揺さぶられることの比喩。ペテロの否認の背景にサタンの働きがあったことは、ルカだけが記している。

**32 あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った** イエスは「試練に遭わ<sup>あ</sup>ないように」とは祈らなかった。試練を通<sup>あ</sup>ることはキリスト者にとって不可欠なことであり、試練の中での信仰、試練を経た信仰こそ精錬された価値ある信仰であると言える（1ペテロ1・7）。**あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい** これは弱いペテロに対する信頼をこめた愛の励ましであった。

**33 主よ、わたしは獄にでも、…一緒に行く覚悟です** このペテロの言葉は、勇ましい悲壮感と主への愛にあふれているが、彼はこの時、自分の弱さもサタンの力も認識していなかった。人間的な強さも情熱も、サタンの力の前には無力なものである。

**34 きょう、鶏が鳴くまでに、…三度 イエスは人知を越えた知識により、ペテロの否認の回数と時まで予告している。わたしを知らないと言うだろう** これは直訳すると「わたしを知っているということを否定するであらう」となり、イエスそのものの否定ではないが、イエスとの関わりを否定していることになる。

**54 裁判を夜間に行うことはユダヤの法律に違反するも**

のであった。ペテロは遠くからついて行った。ペテロは遠く離れて恐る恐るついて行った。人を恐れた弱気のペテロに、ただちに誘惑が襲った。「人を恐れると、わなに陥る」(箴言29・25)のである。

56〜57 一回目の否認。ある女中 この女中は門番であった(ヨハネ18・16)ので、イエスの弟子たちが神殿に来た時によく見かけていたのである。見つめて[キ]アテニゾー「じつと見つめる」の意で「詳細に調査する」というニュアンスがある。「まじまじと見て」(新改訳)。

58 二回目の否認。ほかの人 ここは男性形が使われている。新改訳では「ほかの男」。マタイでは「ほかの女中」(26・71)、マルコでは「先の女中」(14・69)となっている。ヨハネでは「人々」(18・25)となっていることから、おそらくこれらの人々は一緒にいたのであろう。この男性は先の女中よりも、はっきりとペテロをイエスの仲間の一人と断定した。いや 直訳すると「男よ」。

59〜60 三回目の否認。ほかの者が言い張った ヨハネによれば大祭司の僕でペテロに耳を切り落とされた人の親族であった(18・26)。したがって他の誰よりもペテロをしつかりと見ていたので、主張は強かった。この人

もガリラヤ人なのだから このことは言葉のなまりから分かった(マタイ26・73)。ガリラヤ地方はユダヤ地方とはアクセントが違った。あなたの言っていることは、わたしにわからない マタイやマルコは、ペテロが激しく誓って、イエスと関係ない者であることを主張したことを記している。

61 主は振りむいてペテロを見つめられた このことはルカだけが記している。大変な状況にあったイエスが覚えて振りむいて見つめたところに、ペテロに対するイエスの深い関心、思いやりを見ることができる。このまなざしはペテロに、イエスの予告を思い出させた。知らないと言う[キ]アパルネオマイ 「否定する」の意。この語は人格的関係を否定、放棄する意味があり、「告白する」「言い表わす」の反対語として、棄教、背教の教会術語となった(ルカ12・9、Ⅱテモテ2・12)。

62 そして外へ出て、激しく泣いた ここにペテロの後悔と自責の念の深さが表れている。

参考図書 2月10日分と同じ。

## 聖書

ルカ22・31～34、54～62

## タイトル

イエス様のまなざし

## 暗唱聖句

主は振りむいてペテロを見つめられた。

ルカ22・61

## 目標

すべてを見抜いた上で、赦しと回復を与える主のまなざしの中で生きる。

## 導入

(飯田勝彦)

「モーセの十戒の9番目は何ですか？」

「嘘をついてはならない、です」。

真君は、小さい時から毎週教会学校で聖書のお話を聞いています。十戒もしつかりと覚えてちゃんと答えられるほです。真君はいつも「神様に喜ばれる生活をしたい」と願っています。学校でクラスの友だちが嘘をついたり、悪いことをやったりしていても、「自分は絶対にあんなことをしない」と思っていました。ある時、クラスで一つのゲームがはまりました。「真、あのゲームの新しいソフト持つてる？」と友だちから聞かれた時、真君は、持つていないとからかわれると思つて、思わず、「持つてるよ。お父さんが昨日、買つてくれたんだ」と言つてしまつたので

す。「絶対にうそなんかつかない、神様に喜ばれる生活をするんだ」と願つていた真君でしたが、うそをついてしまつたのです。皆さんは、真君のようなことありませんか。

## 自分を知らなかった。ペテロ

今日の聖書のお話には、ペテロさんが登場します。ペテロさんはイエス様の一番弟子であり、弟子たちの中でも兄貴分でした。彼は漁師でしたから、力もあつたでしょう。また、自分がリーダーであることを少し誇りに思つていたと思います。

そんなペテロにイエス様が言われたことは、ペテロには納得できないことでした。イエス様は「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願つて許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈つた。それで、あなたが立ち直つたときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と言われたのです。ペテロは「自分こそがイエス様の一番弟子だし、イエス様に今まで従つて来た。自分がイエス様を裏切るなんてありえない。それどころか、イエス様を守るの私は私だ」という思いがあつたのだと思います。だから彼は「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あ

3月

3日

礼拝メッセージ例

なたとご一緒に行く覚悟です」と断言したのです。ペテロの言葉には迫力がありますね。でも、イエス様は「ペテロよ、あなたに言っておく。きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたのです。この時ペテロは、どう思ったでしょうか。

ペテロは「絶対にそんなことはありません」とイエス様の言葉を受け入れられなかったでしょう。

でもその後、彼はどうなったのでしょうか。

イエス様が捕らえられた木曜日の夜、ペテロはイエス様を追って、大祭司の中庭にいました。すると「ペテロもイエスの仲間だ」言う者がいました。すると彼は「知らない」と三度答えたのです。

その時、鶏が鳴きました。ペテロは、自分の弱さを知らなかったのです。

### すべてを知っておられるイエス様

イエス様は裏切ったペテロを見つめられました。イエス様のまなざしには、どうだったでしょうか。「お前、よくもわたしを裏切ったな」という思いでしょうか。違います。イエス様は、自分の弱さを知らないペテロをあわれみの思いをもって見つめられたのです。

イエス様のまなざしは、ペテロの心のすべてを見通しておられました。イエス様は、自分の弱さを知らないペテロを責めることなく赦されました。でも、それだけではありません。復活された後、ペテロに会い「わたしに従いなさい」と、彼を神様の働きのために召されたのです。

すべてを見抜かれるイエス様のまなざしは、今、皆さんにも向けられています。人は、心を許している人には、正直な自分を見て欲しいと願います。

イエス様は、決してあなたを責め立てる方ではありません。イエス様は、あなたの罪、弱さを赦し、また癒すために十字架で命を投げ出されたのです。復活のイエス様は、今も、愛と哀れみのまなざしであなたを見ておられます。

### まとめ

イエス様のまなざしから、逃げる必要はありません。イエス様に心の底まで見て頂いて、もし悔い改めるものがあれば、素直にイエス様に告白しましょう。イエス様はあなたと見つめ合うことを願っておられます。

♪ わすれないで ♪

(ホーリネス・子どもさんびか73)



# 聖書 ルカ23・13〜25 テーマ 身代わりの十字架

序論

(金井信生)

ローマ総督ピラトは、裁判の結果として、イエスに何の罪も見いだせないと、祭司長たちと役人たちと民衆に告げました。しかし彼らはこの判決を認めず、死刑囚のバラバを釈放してイエスを十字架につけるよう叫びました。ピラトは叫ぶ声の力に負けて、バラバを釈放し、代わってイエスが十字架につけられることになりました。

## 一、圧倒的な罪の力

バラバについて聖書は、「都で起こった暴動と殺人とのかどで、獄に投ぜられていた者」と紹介しています。後に、イエスの横で十字架につけられた犯罪人のひとり「お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ」(ルカ23・41)と言っています、あるいはバラバの仲間だったのかもしれない。バラバも、自分の犯した罪のためにさばきを受け、死刑を受けることを当然と思っていました。

自分の罪を自覚し、定まっている死に対して逃れることができないバラバの姿は、私たちすべての人間の姿です。

聖書に「一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが人間に定まっている」(ヘブル9・27)、また「罪の支払う報酬は死である」(ローマ6・23)とあるように、私たちは自分の罪のために神の前にさばかれるなら、死のほかに答えはないものです。罪を犯したくないと思っても、振り返れば罪だらけであり、死にたくないと思っても、逃れようがないほどに、無力な存在です。

## 二、身代わりとなられたイエス

バラバについて新共同訳では、別の写本に基づいて、「バラバ・イエス(アバの子イエス)か、それともメシアといわれるイエスか」(マタイ27・17)とピラトが群衆に尋ねたと訳しています。

つまり、バラバも当時ありふれていた「イエス」という名だったのです。バラバにしてみれば、助かる希望がまったくなかったのに、自分と同じイエスという名の男が突然にあらわれ、自分に代わって死刑になってくれま

した。それも、バラバが自分の罪を償ったわけでもなく、心を入れ替えたことへの報いでもありません。バラバは何も知らず、何もしないでただ赦ゆるされました。この一切は、人が救われるのは、その行いによるのではなく、一方的な神の恵みであることを、極端なほどにあらわしています。

私たちは、自分の罪のために誰かだれが代わって死んでくださる方がいるなど考えられない、つまらない人間ですが、神の恵みが何の報いも求めずに与えられました。イエスの十字架によって、罪が赦されて救われる道が開かれたことを、ただ感謝して受け取るほかはありません。

### 三、バラバはどこに

自分の罪の深さを思い知らされ、その報いの重さに恐れおののくほかないバラバの姿は、私たちの姿と重なります。

そして、イエスの命と引き替えに釈放されたバラバのその後がどうなったのかは、聖書に一切しるされません。むしろ、イエスの十字架が私のための身代わりの死であったと信じるクリスチャン一人一人が、「その後のバラバ」

となって、主の恵みに応えて歩んでいくことを求められているように思います。

また、イエスが身代わりとなられた罪人は、バラバだけではありません。祭司長や長老たちのねたみ、また民衆たちの無知、そして総督ピラトが自己保身のために裁きを曲げた罪がありました。いずれも私たちが持つ罪であり、すべてをイエスは反論したり責めたりしないで、負ってくださいました。

私たちの身代わりとなって十字架についてくださったイエスは、私たちの病を担い、痛みを負ってくださいました。逃れられなかった罪の力に縛り付けられ、死に對して無力であつた私たちが、主に委ねるときに困難な中でも絶望に終わらずに、平安を得、希望に生きる力が与えられるのです。

### 結論

私たちの負いきれない罪の重荷をキリストは代わって受けて、十字架に死んでくださいました。このキリストを信じて、罪が赦されたことを喜び、どんな悩みもお委ねできることを感謝しましょう。

## 研究資料

(中島啓二)

## テキスト

13 ピラト ピラトは紀元26年頃から36年まで、ローマから総督としてユダヤ地方の統治のために派遣されていた。平常はカイザリヤに居住していたが、過越の期間、監視を強めるためにエルサレムに滞在していたようである。祭司長たちと役人たちは、ピラトはヘロデのもとからイエスが戻ってきたときに、ユダヤの有力者たちを再び招集した。民衆「民衆がみな熱心にイエスに耳を傾けていたので、手のくだしようがなかった」(19・48)とあるように、民衆はここまで、ユダヤの指導者たちの敵意からイエスを守る役割を果たしてきたが、ここでその役割にとどまるか、イエスを攻撃する側に移るかの岐路に立たされる。

14 民衆を惑わすもの ユダヤの指導者たちはイエスを指してこのように言った。しかし、実際には民衆を惑わしたのは彼らの方であった。すなわち民衆は神の民として、神の遣わされた救い主を受け入れるべきであったのに、指導者たちはそれを妨げ、民衆を邪悪な道へと導いたのである。

15〜16 ヘロデもまたみとめなかった ヘロデがイエスを

送り返してきたことで、ピラトはイエスの無罪をさらに強く確信した。この人はなんら死に当るようなことはしていないのである。最初は「この人になんの罪もみとめない」(4)であったのに、ここでは「この人はなんら死に当るようなことはしていない」と論調が弱まっている。だから、むち打ってから彼をゆるしてやることにしよう。本来イエスには、どんな小さな罰に価する罪も、まったくなかったにもかかわらず、釈放するための妥協案とはいえ、イエスに対するむち打ちが提案されている。最後には民衆の声に負けてしまうピラトの弱さを垣間見ることができる。

17 この節は、いくつかの重要な写本で欠けており、原典にはなかった可能性が高い。「―」がついているのはそのためである。しかしその内容は次節以降の理解を助けるものであり、他の福音書の記述とも一致するものである(マタイ27・15ほか参照)。

18〜19 その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ マタイ27・16ではその名を「バラバ・イエス」と記す写本もある(新共同訳はそちらを採用)。後世の写字生が、暴動を起こした犯罪者の名に救い主と同じ名を、不注意と故意とを問わず付け足すことは考えにくく、バラバの名がイエスであつ

た可能性は十分にある（当時イエスはありふれた名であった。コロサイ4・11参照）。その場合、過越しの恩赦はバラバとキリストの「二人のイエス」からの二者択一だったことになる。このバラバは、都で起った暴動と殺人とのかで、獄に投ぜられていた者である。バラバはローマに対して暴動を起こした者であり、それゆえ愛国の士としてユダヤ民族から人気があったのであろう。

20 イエスをゆるしてやりたいと思つて ピラトはこの場面ではイエスをゆるすことについて3回も言及している（16、20、22）。しかし民衆はその都度それを拒み、イエスの処刑を要求した。

21 十字架につけよ、彼を十字架につけよ 民衆はバラバの解放を求めるだけでなく、イエスの死、しかも最も恐ろしい死刑の形態である十字架刑を要求した（申命記21・23参照）。

22 ピラトは三度目に彼らにむかつて言った： 3度目の提案は、1度目（14・16）とほぼ同じである。2度目（20）もおそらく同じであろう。

23 彼らは大声をあげて詰め寄り、イエスを十字架につけるように要求した 指導者たちによるイエスについての虚

説により、民は間違つた方向に導かれてしまった。そして、その声が勝つた 「毎日あなたがたと一緒に宮にいた時には、わたしに手をかけなかった。だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」（22・53）とあるように、闇の力がはびこる時が訪れたのである。

24・25 ピラトはついに彼らの願いどおりすることに決定した ピラトは明らかに、イエスが無実であると確信していた。もし彼の優先順位が正義に基づくものであったならば、ローマの権力を有する彼が、ユダヤの指導者層の要求や群衆の圧力に抵抗することに困難を感じることはなかったであろう。しかし彼の優先順位は実際的であつた。任地で暴動が起こることは、地方総督にとつては経歴に傷がつくことであり、避けねばならないことであつた。イエスの方は彼らに引き渡して、その意のままにまかせた 公正なさばきをするべき総督が、群衆の要求に屈した点において、彼もまた責任を免れることはできないと言える。

参考図書 注解書 Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word), 榎原康夫 (新聖書注解)。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT。

## 聖書

ルカ23・13～25

## タイトル

身代わりの十字架

## 暗唱聖句

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。

## 目標

キリストの身代わりの十字架による罪の赦しを受け取る。  
Ⅱコリント5・21

## 導入

(飯田勝彦)

皆さんは「冤罪<sup>えんざい</sup>」という言葉を知っていますか？  
これは、罪のない人が犯罪者とされることです。この冤罪で、一七年もの長い間、刑務所に入っていた人が数年前に出所したことが大きなニュースとなりました。何も罪を犯していないのに、犯罪者とされ不自由な刑務所に一年でも辛いのに、数十年も入れられていたら、皆さんはどう思いますか。「すみません。許してください。」では、すまされない思いでしょう。

イエス様は、十字架刑というとても苦しく重い刑で死なれました。いったい何があったのでしょうか。

## イエス様に、罪は認められない

イエス様は、罪の中に苦しむ多くの人々を救うために来られました。イスラエルの各地を巡り歩き、病人を癒し、罪人をも救いに導き、神様の素晴らしい恵みを伝えておられました。しかし、それを不愉快に思っている人たちがいました。それは、イエス様に反発していたパリサイ人や律法学者たちでした。彼らは、イエス様が聖書の教えに反することを教え、人々を惑わしていると思っていたのです。そのため、イエス様を殺そうと捕らえました。そして、彼らはローマ総督のピラトに裁判をしてもらおうと、イエス様を連れて行きました。しかしピラトは、イエス様には「何の罪も認められない」と告げたのです。これはピラトだけではなく、ヘロデも同じでした。ピラトは「イエスは死刑にあたるようなことは何もしていない。だから、むちでこらしめてから釈放しよう」と言いました。イエス様の中には、犯罪者になるような罪は、一切見つけることができなかったのです。

イエス様は、私たちと同じ人間の姿で地に来られました。でも、私たちと違う点は、罪のないきよい方であったということです。

## イエス様を「十字架に付ける!」との叫び

罪がないなら釈放されて当然です。しかし、祭司長たちや役人と民衆は「その人を殺せ。バラバをゆるしてくれ」と叫びました。バラバとは、殺人罪で牢屋に入れられていた人です。ピラトは、イエス様を許してやりたいと思つて彼らに呼びかけましたが、民衆は「十字架につける! 十字架につける!」とわめきたてたのです。ピラトは三度目に「この人は、いったい、どんな悪事をしたのか。彼には死にあたる罪は全くみとめられなかった。だから、むち打つてから彼をゆるしてやることにしよう」と言いました。しかし、彼らはかたくなにイエス様を十字架につけたいと願つたのです。それほど、彼らはイエス様を憎んでいました。

## イエス様は罪とされた

ついに、祭司長たちの声が勝ち、ピラトは彼らの願いどおりにすることを決めました。そして、バラバを釈放し、イエス様を彼らに引き渡して好きなようにさせたのです。

イエス様は、罪を犯したことのなきよい方でしたが、十字架で死刑にされました。それは、神様の計画だった

のです。私たちは皆、神様の宝物であり、愛されている存在です。神様は、大切な私たちが罪の中で苦しんでいることを非常に悲しんでおられ、何とか救い出したいと願つておられます。旧約聖書の時代は、罪を赦してもらうために傷のない牛などの動物を殺してささげました。その動物の血が流されることで罪は赦されたのです。でも、動物の血は完全なさげものではありませんでした。私たちの罪が赦されるためには、同じ人間の血が流される必要があります。しかも、何の罪もない血が必要だったのです。何も罪を犯していない人は、イエス様ただおひとりです。

神様は、私たちの罪を赦しのために、罪のないイエス様を、身代わりにして、十字架にかけられたのです。

## まとめ

神様は、自分の罪を認めて「イエス様の十字架の死は私の身代わりであつた」と信じる人の罪を赦してください。そして罪から救ってくださるのです。イエス様を信じて救われましょう

♪じゅうじか♪

(ホーリネス・子どもさんびか62)

# 聖書 テーマ ルカ23・32、38 十字架上での祈り

## 序論

(金井信生)

十字架の上でイエスは七つの言葉を残されました。最初の言葉は、〈父よ、彼らをおゆるしく下さい。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです〉との祈りです。これは十字架の目的が全人類の罪に対する赦しであることを示しています。

## 一、当事者の祈り

イエスを十字架につけた直接の関係者は、はつきりしています。ねたみのためにイエスを訴えた祭司長と長老たち、正しい裁きよりも自分たちの願いを押し通した民衆、裁判を司り、イエスに罪がないことを認めながらも十字架に引き渡した総督ピラト、そしてイエスを捕らえ、裁判の合間にイエスの頬を打ち、つばをかけ、さらには鞭で打ち、十字架に手足を打ちつけた兵卒たち、すべてイエスの体と心を痛めつけた者たちです。

これら自分を苦しめた者たちのために、イエスは〈彼らをおゆるしく下さい〉と祈られました。かつて「敵を

愛し、迫害する者のために祈れ」(マタイ5・44)と弟子たちに命じられたことを、自ら実践された祈りです。

第三者としてとりなすのではなく、自分を傷つけた者を赦す祈りをイエスはささげました。そして、敵をも赦し、救うために自らを犠牲とされた証しです。神様が私たちを罪と死から救われるのは、何の根拠もなく救われるわけではありません。神の独り子であり罪のないお方が、私たちに代わって死んでくださり、執り成してくださった祈りによるのです。

## 二、罪に縛り付けられている人間

〈何をしているのか、わからずにいる〉のは、イエスの十字架に直接関わった人たちだけではありません。真理を知らずに、自己中心と自己中心がぶつかり合い、悩み苦しみ、互いを責め合っている私たちすべてのことです。

十字架に至る裁判の中で、人の罪の数々が現れてきました。そのすべてを受け止めて、イエスは十字架につき、私たちが本来負うべき罪の責めを代わって負ってくださいました。

人の声にまけたピラトは、水を取って手を洗い、「こ



の人の血について、わたしには責任がない」(マタイ27・24)と言います。ユダヤ人たちも、神を冒瀆ぼうとくするという宗教的な罪ならば、自分たちで石打ちの刑を執行すべきなのに、ローマの手による十字架刑を求めました。どちらも、自分の手を汚したくない思いから出たものです。

ピラトは、これで皇帝から総督の職務についてとがめられることはないと安心しました。正しいことを正しいとするよりも、自分の立場を守ることを優先したことを当然のように思っています。

祭司長たちと役人たちと民衆は、これで自分たちを批判して人気を集めている者、メシアとして期待外れの者を厄介やかいばら払いできたと満足していました。本当はねたみや怒りに突き動かされていることをごまかして、あれこれと訴え、自分たちの秩序を保つことだけに精いっぱいです。

彼らは自分の思いが通った、勝ったと思ったことでしょうが、罪に負けているのです。目先の平和や、世のためになることをしたと思っても、神から離れたところでは、自己保身や自己満足にとどまっています。そして神を求めさせず、従わせようとさせない、罪の力にからみとら

れていることに気が付かないままです。ここに登場する人のだれをとつても、「神を求める人はいない」(ローマ3・11) 私たちの姿そのものです。

### 三、すべての人の身代わりについて

イエスは、総督ピラトの判決と、祭司長たちと役人たちと民衆が叫び続ける声を聞き続けられました。もし彼らがこのまま神の前に立つなら、さばかれて滅びに至るしかないことも、また、今彼らに言い逆らつても彼らはますます罪を重ねるばかりであることも、イエスは承知の上で、だまって十字架を負ってくださいました。そして十字架の上で「父よ、彼らをおゆるしください」と祈り、御自分の命をささげてくださいました。

私たちも、自分が罪の力に縛り付けられ、死に対して無力でしかないことを認め、私の身代わりとなつて十字架についてくださったイエスに感謝し、救い主と信じ仰ぐほかはありません。

### 結論

キリストの十字架は罪のある自分のためと知り、「わたしをお赦しください」と信じ祈って、罪の赦しを受けましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

本日の説教の備えをするにあたっては、まず先週の聖書箇所とその要点、暗唱聖句とをよく思いめぐらし、同時に今回の聖書箇所と並行記事(マルコ15・22く32、マタイ27・33く44、ヨハネ19・17bく29)にもよく目を通していただいた上で、説教準備に取りかかっていたきたい。

## テキスト

**32 犯罪人** マタイやマルコでは「強盗」と記されている。彼らは習慣的ないわゆる「強盗」の類ではなく、熱心党の者たちであつたのではないかという見方もある。それと共に、この犯罪人はユダヤ人であつたであろう。39節の言葉よりそのように推測できる。

**33 されこうべ** ヘブル語やアラム語では「ゴルゴダ」と訳されている。マタイ、マルコ、ヨハネは、この「ゴルゴダ」を採用している。一方、ルカは異邦人に向けてこの福音書を書いていることから、アラム語を避けて「されこうべ」と書いたのであろう。「ゴルゴダ」はラテン語では「カルバリ」である。十字架刑場の名がなぜ「されこうべ」と呼ばれていたのか、その理由は諸説あるが定かではない。

ただ、この場所がエルサレム城壁の外側にあつたということだけは確かである(ヘブル13・12)。**十字架** 具体的に十字架刑がどのように執行されたかについては、マルコ15・14以下を参照。当時の十字架刑はいくつかの方法があつた。大別すると、すでに立てられている十字架に、囚人がつるし上げられて固定されるか、それとも横たえられている十字架に釘で打ち付けられ、そしてその十字架が囚人ごとまっすぐに立てられるかである。イエスの場合は、ご自分の十字架をゴルゴダまで運ばされている(26)ので、後者であろう。死刑囚は当然のことながら裸で十字架につけられる。身にまとうものは一切ない。このままの状態で太陽と風にさらされる。しかも、当時の文献では、息絶えるまでには丸一昼夜かかることもしばしばあつたようである。

**34 父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしていますのか、わからずにいるのです** いわゆる「十字架上の七言」のうちの一番目の言葉。ルカのみが記しているイエスの十字架上の言葉である。百卒長は「ほんとうに、この人は正しい人であつた」(23・47)とイエスの十字架を表現したが、このイエスの祈りにその意味を見る。

この恐るべき状況の中で、イエスは迫害者のために祈つ

た（6・27、28、11・4参照）。もちろんこの迫害者の中には、イエスを十字架にかけて罵声<sup>ばせい</sup>を浴びせるローマの兵卒（36）や、イエスをあざ笑う民衆（35）がいた。しかしイエスは、これらの人々だけを指して「彼ら」と言ったのではない。彼らの背後には人間の罪がある。その人間の罪の神に対するとりなしとして、イエスは十字架にかかられたのである。また「彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」という祈りは、新約聖書、特にルカにおいて一貫して流れている神学である（使徒3・17、13・27）。「彼ら」を責めるのではなく、むしろあわれみと父へのとりなしに満ちた祈りである。なお、この「わからずにいる」（無知）という言葉は、知的に欠陥があるということではなく、罪ある状態をあらわす言葉として用いられている。人々はイエスの着物をくし引きで分け合った。死刑囚の衣服を分配するという行為は、当時の貧しい時代の慣習の反映であろうと思われるが、同時に詩篇22・18の成就でもあらう。

**35 神のキリスト、選ばれた者** 神によりメシヤとして「選ばれた者」ならば、まず自分自身を救うことができるはずである、という考え方に立つての役人たちのあざけり

の言葉。一方で、民衆は **立って見ていた** とある。この箇所は、他の福音書の並行記事を一緒に読みながら、民衆の思いや他の登場人物の思いを読み取っていた、きたい。**36 酔いぶどう酒** 主イエスはこれをお受けにならず、最後まで苦痛を耐え忍びたのである。なぜならイエスは、父なる神の御心に従って、人類のために苦しみの杯を飲む決心をされたからである。

**38 「これはユダヤ人の王」と書いた札** この札は捨て札と呼ばれ、死刑囚が刑場に送られる時、その首にかけられるか、あるいは他の人によつて高く掲げられた。そして死刑囚が十字架につけられる時、それも一緒に十字架につけられた。刑が開始されてから通行人が読めるようにと書かれたものである。この札の言葉「これはユダヤ人の王」とは、総督ピラトがユダヤ教当局に対して腹いせに書かせたもので（ヨハネ19・19、22）、ユダヤ人への嘲笑<sup>ちやうしやう</sup>の意味を持つていた。しかしこの場面では、イエス自身に対しての嘲笑の意味も持つている。

**参考図書** A.T.Robertson 「Word Pictures in the New Testament II」(BROADMAN)、小林和夫「栄光の富II」、(日本ホーリネス教団出版部) 他。

## 聖書

ルカ23・32～38

## タイトル

わたしのための十字架

## 暗唱聖句

父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。

## 目標

ルカ23・34

キリストの十字架は、自分のためと知り罪の赦しを受け取る。

## 導入

(飯田勝彦)

皆さんの学校では、掃除の時間があるでしょう。

「少しぐらい、手を抜いても大丈夫だろう」と思っている、ホコリはどんどんたまってしまいます。もし、そのままほっておくと健康にも影響が出てきます。

目に見えるホコリも人に悪影響を与えるとするとするなら、目に見えない心のホコリはどうでしょうか。

「心のホコリ？」とは、何だと思いますか？それは、罪です。罪をそのままにしておくと、どんどんひどくなっ  
て行きます。皆さんの心は罪まみれになっていませんか。  
ゲームならリセット・ボタンを押せば、最初からやり直  
せます。でも、罪は私たちの力ではリセットできないの

です。そのままにしておくなら、大変なことになってしま  
います。

## 最後まで傷つけられたイエス様

イエス様は、祭司長たちに引き渡され、十字架にかけ  
られることになりました。十字架刑は当時、重罪人が受  
ける刑で、十字架にかかる者は呪われた者と言われるほ  
ど、苦しく屈辱的な刑だったのです。しかも、二人の犯  
罪人と一緒でした。犯罪人は、自分の罪のために罰を受  
けることは当然です。しかし、イエス様は何か十字架に  
かけられるような罪を犯したのでしょうか。いいえ、イ  
エス様は、何一つ罪を犯したことのないお方なのに、十  
字架にかけられてしまったのです。

十字架にかけられるときには、まるで昆虫の標本のよ  
うに手と足に釘を打ちつけられます。それだけでも、苦  
しいことなのにイエス様は、その十字架にかかった後も  
傷つけられたのです

「他人を救ったのなら、自分を救ってみろ」と役人た  
ちがあざけりました。また、兵士たちは酸いぶどう酒を  
突きつけながら「お前がユダヤ人の王なら、自分を救っ  
てみる」と侮辱したのです。ここに人間の醜さが表され

ています。

イエス様は、最後の最後まで傷つけられ、苦しめられました。

### 十字架の上で祈られたイエス様

もし、皆さんがイエス様だったら十字架にかけた人たちに対してどのような言葉をかけるでしょうか。「無罪である私を、こんな目にあわせて、このままじゃすまないからな。今に見てろよ！」と文句をぶつけても不思議はありません。

でも、イエス様はどうだったでしょうか。イエス様は、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と祈られたのです。イエス様は、神様に対して十字架につけた人たちの赦しを願われたのです。イエス様のこの祈りからも、イエス様は罪のない方であつたことが分かります。もし、ここでイエス様が不平不満や文句をぶつけたなら、イエス様は聖いお方、罪なきお方とは言えません。

イエス様は最後の最後まで傷つけあざけられたにも関わらず、イエス様から出てきたものは、愛、たつたのです。イエス様は、愛しておられたからこそ、彼らの赦しを祈

られたのです。これは、私たちに対する祈りでもありません。

### 私の罪のために死なれたイエス様

イエス様を十字架につけた人たちと私たちは、同じ罪人です。私たちは罪の中にいるから罪が分かりません。でも、イエス様はそんな愚かな私たちのために十字架で命を投げ出してくださいました。それは、私たちが罪赦され、救われるためです。イエス様の十字架は、私たちではどうすることもできない心のホコリを取り去るためのものです。

皆さんは、イエス様は自分の罪のために死なれたことを信じますか。イエス様は、あなたの罪のために苦しい十字架に文句も言わずかかってくださいました。そして、罪に対する呪いを全部ひき受けてくださったのです。

### まとめ

「イエス様の十字架は、私の罪のためであつた」と信じる人に、神様は罪の赦しと素晴らしい人生を与えてくださいます。

♪ ゆるすためです ♪

(ホーリネス・子どもさんびか58)

# 聖書 ルカ23・39〜43 テーマ 十字架による救い

## 序論

(金井信生)

イエス・キリストが十字架につけられた時、左と右に犯罪人も十字架につけられました。その一人にイエスが与えられた約束の言葉は、十字架によってどんな人でも救われることを、はっきりと示しています。

## 一、すでに救われている

十字架の上でイエスは七つの言葉を残されました。最初の言葉は、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23・34)との祈りです。

「何をしているのか、わからずにいる」のは、イエスの十字架に直接関わった人たちだけではありません。真理を知らずに、自分の思うままに、あるいは世に流されるままに、ぶつかって傷つけ合ったり、悩み苦しみ、互いを責め合っている私たちすべてのことです。

十字架に至る裁判の中で、誰もイエスに罪を認めること

はできませんでした。しかし、イエスは黙って十字架につき、私たちが本来負うべき罪の責めを代わって負ってくださいました。

神は何の根拠もなく、私たちの罪を赦し、死の力から救ってくださったわけではありません。罪のないお方、私たちを責め裁くことのできるキリストが「父よ、彼らをお赦しくください」と執り成して祈ってくださったことによって、すべての人に罪の赦しが備えられたのです。

## 二、自分の罪を認め、悔い改める

イエスの左右の十字架につけられた犯罪人は二人でしたが、イエスから天国の約束をいただいたのは、一人だけでした。

救われた犯罪人は、まず「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である」(伝道12・13)と教えられているところに立ち帰りました。そして、その命令を守ってこなかった自分の罪を認め、今苦しめられている刑罰を当然の報いであると認めました。

さらに、イエスが、《御国の権威をもっておいでになる》神の子であり、救い主であると信じました。後は苦し

みの中で死を待つばかりであり、自分の力で自分を救うことができないことを認めて、ただ神のあわれみとキリストの恵みにすがったのです。

自分の罪を自覚しても、自分で始末することも償うこともできないのは、この犯罪人だけでなく、私たちも同じです。過去を取り返すこともできませんし、これからは正しく生きようと決意しても、実行する力もありません。精一杯まじめに生きて、神の前に本当に赦され、天国に入っていただけの確信は生まれません。ただ主イエス・キリストの恵みとあわれみだけが、私たちを救うことができるのです。

### 三、救いの約束

イエスは、「わたしを思い出してください」としか願うことのできない犯罪人に、「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいる」と、直ちに答えられました。

「きょう」与えられる救いを、このルカによる福音書は、何度も強調しています。

イエスの生まれた時に、御使は「きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった」（ルカ2・11）

と告げました。

またイエスはザアカイに「きょう、救がこの家に来た」（19・9）と宣言されました。

《パラダイス》とは、ただ死んでから行くところではありません。だれでもイエスを救い主と信じたその時から、罪が赦された喜びと、主が共にいて支え守ってくださいっている平安の中に生きることができるのです。

また、イエスに赦された恵みにこたえて、互いに赦しあっていくなら、私たちのまわりがパラダイス（楽園）に変えられていくのです。

《わたしと一緒に》とイエスは言われました。私たちが重荷に耐えきれなくなりそうなとき、悲しみや苦しみに負けそうになる時、イエスは一緒にいて慰めや励ましを与え、パラダイスの平安を満たしてくださいとお方です。

### 結論

イエスの十字架は私たちの救いです。独り子を与えてくださった神様の愛に感謝し、悔い改めと信仰をもって、ご自身を犠牲として献げられた主イエスを、私の救い主と信じ仰いで、主の恵みと祝福にあふれた生涯に導かれましょう。



## 研究資料

(宮澤清志)

本日は受難週（棕櫚の主日）である。本日の教案の目標は「悔い改めと信仰をもつて、十字架による救いを受け取る」とある。2月10日以来、十字架が語られ続けてきた。その締めくくりのみ言葉として、私たちは本日の言葉を聴くのである。礼拝において、もしくは分級において幼子たちに決断を促す時を持つこともゆるされるであろう。

さて、本日の聖書箇所を中心は、言うまでもなく43節のイエスの言葉である。しかし同時にイエスにこの言葉を語らせた前節の強盗の言葉も10日に語られたみ言葉同様、私たちが心に刻みつけるべき言葉である。神の義は、信じさえするならば、罪人を義人に変えて永遠の救いに入れてしまうような神の義なのであって、わたしたちは、この十字架における神の義を徹底して思いめぐらしつつ、受難週の時を過ごしたいものである。

## テキスト

39 32〜33節より、イエスの十字架は二人の犯罪人の間に立てられたことが分かる。伝説によれば、本節のイエスをののしる言葉をかけた犯罪人は、その左側にいる犯罪人だったと

言われている。「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」とののしった言葉から、この男がユダヤ人であって、革新的な熱心党のメンバーであつたであろうと推測される。この男のこの言葉を読み解くと、彼は死に際してなお己の運命に抵抗し、己の犯した罪を他になすりつけ、特に十字架のキリストにその罪を着せようとしているのであろう。十字架上で死ぬのみで、両脇の犯罪人を救うことをしないのみか、イスラエルのために戦うことをしなかったメシヤは、もはやメシヤではないというのである。それゆえ彼は、役人や総督の側に立ってイエスを裁くのである。一方イエスは彼の熱心党員としての裁きをも背負い、黙って十字架にかかられた（イザヤ53・7）。

40〜41 この部分についてはルカのみが語っている。他の福音書では、「一緒に十字架につけられた強盗ども」（マタイ27・44）、「一緒に十字架につけられた者たち」（マルコ15・32）となっている。いずれの記述も、この問題をふさわしく扱っているであろう。二人とも、初めはイエスをののしっていたのかも知れない。しかし、十字架上でのイエスの振る舞いを見て、片方の強盗が悔い改めへと至ったのかも知れない。いずれにしても、この強盗は自らをイエスの側に置いた。自

分の死を目の前にして、自らが罪人であることと、自らにくだった厳罰を受け入れたのであろう。

**42 御国の権威をもっておいでになる時には** この箇所にはいくつかの訳語が見られる。「御国の位にお着きになるときには」(新改訳)、「御国においてになるときには」(新共同訳)、「王権をもって来られるときには」(フランシスコ会訳)、「あなたの王国」(岩隈) など。これらの相違は写本(筆記者たちが写したテキストを幾度となく書き写したものの)の相違による。ある写本の直訳は「あなたの御国に行くとき」となり、また別の写本では「あなたの御国をもって行かれる(来られる)とき」となる。新改訳は前者、口語訳は後者の写本を採用する。訳の良しあしではなく、各教会で使用している訳に注意を払いつつ、説教者の黙想のヒントとしていただきたい。

**43 きょう** ルカにおいて、この言葉の一つの意味は、もちろん「昨日と明日の間の二十四時間」という意味を持つ(12・28、13・33等)。しかし、ルカにとつてはそれ以上に重要な「きょう」とは、時間の流れの中から抜け出した、特別な意味を持つ。それは、イエスのメシヤ的救いの出来事の起こる日のことである(2・11、4・21、5・26、19・5、9等)。ありふれた「ある日」を「きょう」に変貌<sup>へんぼう</sup>させる力は、神の

約束の成就にある(ヘブル4・7)。同時にその時間は、「歴史によって期待され準備されたものを満たしつつやってくる」のであり、ルカからは離れるが、そのことをもつともよく表しているみ言葉は「時は満ちた」(マルコ1・15)の「時」である。

さて、このことに関連し、ギリシャ語には「カイロス」と「クロノス」という、2つの時間感覚があると言われる。「クロノス」とは、英語の「クロック」が示すように、時計で測ることのできる時間である。「カイロス」の方は、「永遠の今」という意味合いを持つ言葉であり、イエスがこの強盗に対して語られた「きょう」とは、後者「カイロス」の意味においてである。

**パラダイス** ペルシャ語から来た外来語で、元来は「囲い」を意味し、果樹その他を植え込んだ「園」を意味した。七十人訳聖書(ギリシャ語訳旧約聖書)では、特に「神の園」をさす言葉として用いられており(創世記2・8以下、13・10、エゼキエル31・8)、そこから派生して、元来の、しかし今は隠されており、未来に再び啓示される楽園、すなわち終末の時代に回復されるエデンの園を意味する名称となった。

**参考図書** 3/17に同じ。

## 聖書

ルカ23・39～43

## タイトル

十字架の救いを受け取る

## 暗唱聖句

あなたはきょう、わたしと一緒にパラ

ダイスにいるであらう。

ルカ23・43

## 目標

悔い改めと信仰を持って、十字架による救いを受け取る。

## 導入

(飯田勝彦)

五年生の博君は、勉強もできるし、スポーツも万能でした。でも、クラスのみんなは博君となかなか仲良くできませんでした。博君はいつも、体育の授業になると自分の出番だと熱くなります。百メートル走など一人で行う種目の時は良いですが、バレーボールなどのチームでの種目になると、博君の欠点が出てしまうのです。博君は、自分が一生懸命になればなるほど、人の失敗が許せなかったのです。チームメートが失敗すると「何やってんだよ。」とすぐ文句がでるのです。でも、いざ自分が失敗すると「ごめんね」の一言もないのです。博君は、自分の失敗を素直に認めることができなかったのです。皆さんも、自分の失敗を認めるだけで仲良くできたの

に、それができずに気まずくなってしまったことはありませんか。

## イエス様に悪口を言う犯罪人

皆さんは、今までの生活で苦しかったことや、悲しかったことがあったでしょう。その原因をずっと突きつめていくと、幸せを妨げる罪に行き着きます。

その罪が解決されないと、幸せに生きることとは出来ません。罪は、私たちの身体の外にあるのではなく、内にあります。イエス様は私たちを、その罪から解放するために、手足を釘で打たれ十字架にかかられました。

十字架にかかられたイエス様の横には、右と左に犯罪人が一緒につけられたのです。罪を犯したこともないイエス様でしたが、犯罪人と同じ扱いを受けられました。しかも、犯罪人の一人が「お前はキリストだろ。だったら自分を救い、おれたちも救ってみろ」とイエス様に悪口を言ったのです。イエス様は、どんなに悲しかったでしょうか。

イエス様に悪口を言った犯罪人は、人のことをとやかく言う資格があるでしょうか。ありません。なぜなら、

彼自身は十字架にかからなければならぬほどの罪を犯しているからです。彼の言葉には、罪を反省しているような様子はありません。自分の罪を認めずに、人を責めるのは悲しいことです。

### イエス様によって救われた犯罪人

イエス様の隣にいたもう一人の犯罪人は、悪口を言った者に対して「お前は同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。お互いは自分のやった事の報いを受けているのだから、こうなつたのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」と言いました。彼は、自分の罪の重さを認めていました。自分の罪を素直に認めない人は、いつも他の人を責めることが多いのです。皆さんは、どうですか。自分の罪を認める人は、イエス様の救いを心から求めることができます。

この犯罪人は、自分の罪を認め「イエスよ、あなたが御国の権威をもつておいでになる時には、わたしを思い出してください」と言いました。彼は、イエス様こそ自分を救ってください方だと信じた。そして、罪から救って欲しいと真剣に願ったのです。これは、彼が死ぬ

前の人生最後の願いでした。

イエス様は、信仰をもつて救いを求める彼に「よく言うておくれ、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」と言われました。

この犯罪人は、イエス様から「お前は、救われた。大丈夫だよ」と言われたのです。彼は、どれほどうれしかったでしょうか。

自分の罪の報いとしてたゞ死を待っていた彼が、罪赦され、しかもパラダイスへの希望を持つて死を迎えることが出来たのです。彼にとつて死は絶望ではなく、パラダイスへの通過点となつたのです。

### まとめ

私たち誰にも罪があります。その罪を認めて救い主イエス様を信じるなら、誰でも救われます。

イエス様は、あなたに希望に満ちた人生を与えてくださいます。私たちの罪のために十字架で命を投げ出してくださったイエス様を信じて歩み始めましょう。

♪じゅうじか わが力♪

(ホーリネス・子どもさんびか115)

# 聖書 ルカ24・13〜32 テーマ 霊の目を開かれて

## 序論

(金井信生)

エマオの村に向かって歩いていった二人の弟子は、一緒に歩かれるイエスがわからず、十字架の事実と、復活の知らせについて自分たちの知るところを伝えます。やがて弟子たちの目は開けてイエスだとわかり、エルサレムに戻って、復活の主にお会いしたことを伝えました。

## 一、共に歩まれる主

二人の弟子は、イエスの復活の知らせを聞いても、これ信じることができずに戸惑ったまま、故郷の村エマオへ帰ろうとしていました。そこにいつの間にか共に歩んでおられたのが、復活された主イエスです。弟子たちが、すぐにイエスとわからなかったのは、不安と恐れに暗い顔をし、希望も答えもでない議論に終始していたからだけでなく、見ないで信じる信仰に導かれるために、〈目がさえぎられて〉いたからです。

二人の弟子は、まず口を開いて、〈ナザレのイエス〉に

ついて知るところと、聞いても信じられない復活の知らせを伝えます。イエスは正面から向き合って責めたりせず、まず二人の不安やためらいの言葉に耳を傾けてくださいました。

続いて、耳を開いて、イエスが聖書から解き明かされる十字架と復活の言葉を聞きました。死を滅ぼしてよみがえられたイエスは、今も私たちと共に歩まれるお方です。私たちの不安や恐れのおいを聞き取り、み言葉を通して確かな導きを語りかけておられます。主の姿が見えなくても信じる幸いがあるからです。

## 二、心を燃やされる主

弟子たちは、後になってから、〈心が内に燃えた〉と振り返ります。それは、イエスが、苦難を通って栄光に入るメシアの通るべき道を示し、聖書全体からこれを説き明かされたときでした。復活を知らせる婦人たちの報告はありましたが、イエスの姿は見つからず、信じたくても信じられない暗さを感じる中、そこに光があてられ、燃え出したのは、神様のみ言葉です。

平坦な道に進むときには、特別な勇氣は必要ありません。

険しい道が目の前にあっても栄冠が約束されているからこそ、心が燃え、そこを上る力が生まれてくるのです。イエスは、十字架の死の苦しみを通られて、復活の栄光のお姿を現してくださいました。それは、後に続く私たちが苦難を恐れな

いで信仰に進み、主と共に栄光にあずかるためです。パンを裂いて渡してくださったのは、神の御子が人となつてきてくださり、血が流され命を落とされた、十字架の意味を自分のこととして受け取るためでした。イエスを自分の救い主と信じるとき、私たちも目が開かれ、イエスが共に歩んでくださったことがわかります。そしていつも聖書のみ言葉によつて、正しい道を教え、神様に愛され守られて、こんな私たちでも終わりまで信仰を全うできるのだ、と励まされてゆくのです。

### 三、復活の生涯に導かれる主

イエスがよみがえられたと信じたとき、弟子たちの内に復活の命があふれました。重い足取りで下つてきた二人は、向きを変え、エルサレムへの上り坂を駆け上がります。そして人目も恐れずに、仲間の弟子たちに、よみがえられたイエスに出会ったことを知らせました。

イエスを信じて救われるとき、私たちは新しい人生に生まれ変わります。今までは重荷を引きずったままだったのに、十字架のもとにすべての重荷を下ろすことができるのです。恐れや不安を抱いたまま空しく死んでいく他なかった者に、永遠の命が注がれて、主と共に歩み、最後は栄光の御国に凱旋（がせん）していく希望が生まれてくるのです。これがイースターの幸いです。

主は、何度も弟子たちの前に姿を現し、両手両足の傷をそのままお見せになつて、復活の事実を示されました。三度否定したペテロや、仲間の証言も信じなかったトマス、復活を断固否定し、クリスチャンを迫害する最前線に立っていたパウロなど、みな自分がいかに不信仰であり、罪人であつたかを隠さずに伝えました。そして恵みによつて救われ、生かされ、今は主の働きに用いていただける者となつたことを証しているのです。

### 結論

私たちも霊の目を開いていただいて、よみがえられたキリストを信じ、生き生きとした希望にあふれる喜びをいただきましょう。

## 研究資料

(中島啓二)

ルカによる福音書も、イエスの復活の場面を直接には描いていない。御使いたちが女性たちにイエスの復活を宣言し、それを聞いた彼女たちが他の弟子たちに知らせた。ここに登場する二人の弟子も、彼女たちからそのことを聞いていた。にもかかわらず、その心はなお暗かったのである。

## テキスト

- 13 ふたりの弟子 一人の名はクレオパとある。ヨハネは十字架のそばにクロパ（＝クレオパ）の妻マリヤがいたと記す（19・25）。それがもう一人の弟子かもしれない。エルサレムから七マイル 約12km。エマオという村 正確な位置は不明。ヨッパへの途上にアムウスという地名があるが距離が32kmもある。エルサレムの西のアツマウースは距離が6kmと、半分しかない。もしかしたらルカは往復の距離を記したのかもしれない。
- 15 イエスご自身が近づいてきて 失意の中にある彼らに、イエスの側から近づいてくださった。信仰も神からの賜物なのである（エペソ2・8）。
- 16 彼らの目がさえぎられて… イエスの容貌が以前と変わった

ていたのではない。マグダラのマリヤの場合と同様（ヨハネ20・15）、霊的な理由で、彼らはイエスに気づかなかったのである。

- 21 イスラエルを救うのはこの人であろうと この弟子たちはイエスを単なる力ある預言者としてだけでなく、ある種の救い主と見ていた。しかしそれは、当時の一般的な見解である「神の民、すなわちイスラエル」を敵の手から救い出す救い主であり、その望みはイエスの死によって、消え去っていた。きょうが三日目なのです 彼らは、イエスが以前、ご自身の死の3日目に何かが起こると語られたのを、おぼろげに覚えていたのであろう。にもかかわらず、数々の出来事から何も悟らなかつたのは、霊的に鈍感と言わざるを得ない。
- 22～23 わたしたちの仲間である数人の女が… 10節に記されている女性たち。彼女たちは御使いを通してイエスの復活の予告を思い出し、墓が空であることの意味を悟った。そして喜びをもってそのことを使徒たちに伝えたのであるが、彼らはそれを信じなかつたのである。
- 24 イエスは見当りませんでした 墓が空である事実を弟子たちは確認していた。だがその事実も、死者の中にイエスを捜す者には、失望しかもたらさないものである。



25 預言者たちが説いたすべての事 間違ったメシヤ（キリスト）理解が、間違ったイエスの死の解釈につながり、その結果が失望となった。それを正すため、イエスは聖書に基づく正しいメシヤ理解を弟子たちに語ったのである。

26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入る これが預言者の指し示すキリスト像であった。苦難は、栄光のために必要な筋道であったのである。しかし当時のユダヤ社会にメシヤと受難を結びつける思想があったかどうかは疑問である。むしろ一般的には、受難は国家・民族と結びつけられ、メシヤはその苦難からの解放をもたらす使者として期待されていたのである。

27 モーセやすべての預言者からはじめて 旧約聖書は律法（モーセ五書）、預言書、諸書（詩篇など）の三つに分類される。聖書全体にわたりの「聖書（グラファイス）」は「諸書」の意もあるが、ここでは旧約聖書全体ととらえるのが妥当。

28 なお先へ進み行かれる様子であった このようにして相手に、もてなしを申し出る機会を与えることは、礼儀になったことであった。

29 しいて引き止めて 旅人へのもてなしは宗教的にも高位

の美德であった。夕暮になっており その日のメインの食事をする時間。5千人の給食も「日が傾きかけた」（9・12）頃であった。

30 パンを取り、祝福してさき… 普通はその家の主人がする作業。それをイエスが行ったのである。これは弟子たちに、前述の5千人の給食、さらに最後の晩餐（22章）を思い出させたであろう。

31 彼らの目が開けて その呼び覚まされた記憶が彼らの目を開き、彼らはいよいよイエスを認めるに至ったのである。するとすぐにイエスは見えなくなったが、そのことはもはや彼らに悲しみをもたらさなかった。

32 お互の心が内に燃えたではないか 単なる心の高揚ではなく、それ以上のもの。バークレーは「心が不思議と暖かくなった」と訳す（これはウエスレーのアルダスゲイトの回心を思い出させる）。この弟子たちのように、後代の信者たちもまた、よみがえられた主の臨在を認めることから、内なる心の燃え上がりを経験するのである。

参考図書 注解書 Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word), 榊原康夫 (新聖書注解)。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT。

## 聖書

ルカ24・13〜32

## タイトル

復活のイエス様に出会う

## 暗唱聖句

彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。

## 目標

ルカ24・31

霊の目を開いて頂いて、復活のキリストを見る者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

イースターおめでとうございます。今日は、イエス様が復活された喜びの日です。教会では、毎週日曜日に礼拝しますが、どうしても分かりますか？それは、イエス様が日曜日の早朝に復活されたからです。教会は、約二千年の間、日曜日に教会に集まり、復活されたイエス様を覚えて礼拝しています。ですから、毎週、イエス様の復活の恵みを頂くことができるのです。この素晴らしい恵みを皆さんも自分のものにして欲しいと思います。

## 死より復活されたイエス様

3月の最初からずっと、イエス様の十字架への道をたどっています。イエス様は、どうして十字架にかかって死ななければならなかったのでしょうか？何か、悪いこ

とをしたからですか？イエス様が十字架にかかれることを、一番弟子のペテロはどうして守ることができなかったのでしょうか？皆さん覚えていますか。

イエス様は、十字架にかかるような罪は何も犯していませんでした。でも、私たち人間の醜い罪を赦し、罪から救い出すためにイエス様は、十字架にかけられ死なれました。そして、お墓に葬られたのです。そのお墓の入り口は、大きく重い石でふさがれました。

死とは、悲しく恐ろしいものです。でも、イエス様は死んで終わりではありませんでした。死から復活されたのです。これは、イエス様が前に約束されていることでした。イエス様は、復活を通して、全人類の最大の敵である死を撃ち破り、勝利してくださいました。

## イエス様が分らない弟子たち

イエス様が復活されたその日、二人の弟子たちがエマオの村に向かって歩いていました。二人の話題の中心は、イエス様のことでした。

「なあ、イエス様が十字架で殺されたなんて、信じられないよ」。

「悲しいけど、本当なんだ。でも、そのイエス様が復活

されたりしいよ。婦人たちが墓に行ったら、イエス様がおられなくて、天使たちが『イエス様は生きておられる』と告げたりしいんだ」。

そこに、何と復活されたイエス様が来られ、弟子たちが話し合っている内容を尋ねられました。弟子たちは立ち止まって、エルサレムで起こったことを話し始めました。しかし、彼らはそれが復活されたイエス様だと気が付きません。それは、彼らの目がさえぎられていたからです。

もし、復活のイエス様を信じるのができないとするなら、弟子たちと同じように目がさえぎられているのです。それは身体のみではなく、霊のみです。

### イエス様が分かった弟子たち

復活されたイエス様は、弟子たちに聖書に約束されているご自分のことについて話されました。

弟子たちは、イエス様のお話しが非常に興味深かったのです。もうと聞きたいと思つて「一緒に泊まってください」イエス様に願いました。イエス様は、それを快く引き受けられました。

食事の時間になったとき席に座り、イエス様はパンを取り、賛美の祈りを唱えてパンを裂き、弟子たちに渡さ

れました。その時です！弟子たちの霊の目が開かれたのです。目の前におられる方が、イエス様だと分かったのです。その瞬間、イエス様の姿は見えなくなりました。

弟子たちは「あの方と話しをしている時に、心が燃えていたのは、あの方が復活のイエス様だったからだ」と語り合いました。そして、彼らは復活のイエス様に出会ったことを、他の弟子たちにも伝えたのです。復活のイエス様に出会った弟子たちは、どんなにうれしかったでしょうか。

### まとめ

復活のイエス様との出会いは、私たちの歩みに大きな喜びを与えてくれます。でも、霊の目が開かれないと復活のイエス様が分かりません。「私も復活のイエス様に出会いたい」と願う人は「私の霊の目を開いて、イエス様が分かるようにしてください」と是非、祈ってください。また、教会学校の先生に祈ってもらってください。復活のイエス様に必ず出会うことができ、大きな喜びが与えられますように！

♪よろこびは わがここに♪

(ホーリネス・子どもさんびか132)

# 牧羊ひろば



## 枚方希望教会

あなたの若い日に、あなたの造り主  
を覚えよ。  
伝道12・1

### ●これまでを振り返って

枚方希望教会は創立して42年になります。どの教会でもそうだと思いますが、当教会でも一九七五年〜一九八〇年頃には教会学校の生徒数が100名前後にまで増え、それも近隣の小学生たちが競うように出席して活気に溢れていましたので、さながら小さな分教場のような感じがありました。

しかしその後は下降線をたどり、出席者も一時は10名前後にまで落ち込みました。それでも祈りながら働きを続けてきました。

今から6年くらい前だったでしょうか、神様はかつて生徒だったクリスチャン2世を、その子どもたちと共に教会に送り返して下さいました。同時に、若い教師たちも備えて下さったので、それ以来、教会学校が息を吹き返したように感じて

います。

### ●教会学校の祝福

学校には学校の、塾には塾の友だちがいるでしょう。しかし、それらとはまた違う、親ぐるみの、イエス・キリストを基とするもっと深いつながりを、子どもたちは、教会学校の中で感じています。どの生徒をとってみても、週に一度のこの時間を、心から楽しみにしているようです。

ここでは同年代という横割りの関係だけでなく、教会学校でのお兄さんお姉さん（弟や妹）という縦の関係、また教会に集う大人たちとの、ちよつとしたやり取りという斜めの関係も豊かです。

そこには本来の意味での「社会（コミュニティ）」それも同じ主を仰ぐ、キリストによって自由にされた人々のうるわしい交流があります。幼少期に通る過ぎる原体験の一つとして、このような、年齢や学校や立場を超えた、お互いを尊重し赦し合う共同体に属しているという意識を持つことが、彼らの霊的そして社会的成長にどれほど大きな益をもたらすものか。これは神様が与えて下さる多くの恵みの一つだと思えます。

### ●主日の子ども礼拝

現在、大人の礼拝に先立ち、子どもの礼拝は9時15分から小学科と幼稚科を合同で行います。プログラムは讃美、主の

祈り、子どもカテキズム（教理問答）メッセージ、献金、頌栄、祝福と進みます。教理問答の問いを読むこと、献金奉仕することを子どもたちに任せ、小さい頃から礼拝の形式に親しめるようにしています。

教師の説教をお互いに研鑽<sup>けんさん</sup>しようとの意図で、2年ほど前から、年に1〜2回、誰かの説教を録画してそれを題材とし、教師会の中で研修するようにしています。自分の説教を教材にされる教師にとっては勇気の要ることですが、よりよい説教をするという目的のためです。

### ●小学科の分級

約30分間の礼拝が終わると、分級を始めます。牧羊者のワークを用いて、小さい子どもは工作をするなど、年齢に応じて取り組んでいます。この分級の中で教師たちは、生徒一人ひとりの個性、集団の中の言動や振舞いの特徴を知ることができ、そのことから彼らの背後にある親子のありかた、兄弟との関りかた、家庭外の集団（学校など）での様子を想像し、聖書の理解度、霊的な成長を把握することができます。

分級の様々な場面で、担任する教師が生徒たちをどのように励まし、どのように注意し、どのように導くのか。この点においては教師の個性や考え方が顕著に現れます。

去る二〇一二年9月、大阪教区で開催したCS教師研修会

にお招きした水野晶子師から「教師の一致が教会学校を良いものにする大切な要素の一つ」と教わりました。生徒への接し方、導き方という重要な事柄についてじっくりと話し合うことも、今後の教師会の大きな課題だと思わされています。

### ●中高校の分級

中高校では「礼拝は大人の礼拝に出席する」という考えのもと、9時15分から「聖書の学び会」という形式で、小学科とは別の場所で開催を持っています。賛美は教区のバイブルキャンプで使う歌から選び、祈って始めます。牧羊者のカリキュラム箇所から、聖書を全員で1節ずつ輪読し、黙想。記事の背景などを教師が解説したあと、いくつかの課題を挙げて、各自がみことばから受け取めたことを自由に話し合うようにしています。

生徒が、感じたこと考えたことをなかなか言葉に表せず、ほとんど教師だけが話しているという日もあれば、質問や意見、感想が、生徒たちから活発に出てきて、そこから、聖書の助けによって、聖書の真理に導かれる日もあります。月に一度は小学科の礼拝に合流し、縦の交りも保つようになっています。

このクラスの生徒たちも、神様を送ってくださった大切な魂だと覚え、彼らが救われるよう祈っています。

## ●子ども礼拝の時間について

子どもの礼拝を先に済ませるので、大人が礼拝している間は、それが終わるまで別の場所で待っていなければならぬという現実があります。教会の限られたスペースの中で、子どもが騒がずに過ごすのは難しく、また近所の公園に行つて遊ぶのは危険があるので付き添いが要る、などの問題に直面し、教会全体でこのことを話し合いました。

その結果、現在は教会学校の生徒のほとんどが教会員の子弟なので、信仰継承の基本は家族が共に礼拝をささげることではないだろうか、という意見で一致しました。

とはいえ、礼拝の雰囲気を重ねるためには、乳児や幼児を保育するという配慮が必要であり、小学校低学年のころまでは、長時間席に座つて静かに話を聴く習慣が十分にはついていません。そこで、教会学校の礼拝は基本的に、これまで通り大人の礼拝と時間をずらして持ち、月に1度だけ「親と子の家族礼拝式」として大人の礼拝に合流するようにしました。

## ●暗唱聖句大会・お誕生日会と親子礼拝

毎月の第四主日は教会学校の礼拝をお休みにして、その時間を「暗唱聖句大会」と「お誕生日会」に充てます。その月に学んだみことばを暗唱し、言えたみことばと同じ数だけのごほうび（鉛筆やシールなど）をもらえます。

誕生日を迎えるお友達（中高生も合流）には王冠をかぶってもらつてお祝いします。そのあと手作りのデザートをいただくのが子どもたちの楽しみです。

このあとに続く「親と子の家族礼拝式」

には、会堂の左前の一角に子どもたちが集まつて座り、親、教師、お友達と一緒に讃

美歌や交読文、主の祈りや使徒信条をささげます。この礼拝

では通常の説教の前に「子どものためのお話」というプログラムがあり、牧師が講壇から降りて子どもたちに近づき、牧羊者の聖書箇所から、みことばを解り易く語ってくれます。大人たちも微笑みながらこの説教と一緒に聴いています。

## ●年間行事について

①《進級式》4月。年度初めの礼拝式の中で、進級式をして、お祝い（讃美歌や聖書、読み物）を贈ります。

②《イースター》朝、近くにある公園で野外礼拝をささげ、エッグハントをします。春の喜びに包まれます。

③《花の日》近くの交番、消防署にお花と感謝の手紙をもつて行き、賛美歌をうたいます。消防署で消防車に乗せてもらえる、子どもたちは大喜びです。

④《母の日・父の日》分級の時間を利用して、メッセージ



誕生会



カードを作り、親に贈ります。

⑤《CSファミリーキャンプ》通常の主日礼拝から始まる夏のキャンプは、子どもたちの一年で一番の楽しみです。午後、キャンプ場へ。ずっと長い間、京都教区の「湖西祈りの家」を使わせてもらいましたが、二〇一二年は気分を変えて、枚方市郊外にある「穂谷野外活動センター」を使いました。

到着後はアスレチックや虫採り、チューベットのおやつのと、宿泊所に併設の体育館でボール遊び。シャワーと夕食の後は研修室で学びタイムです。教団から出ている3部構成の夏期教案を使い、最後の学びの後には教師と生徒が1対1になってカウンセリングをします。

夜の花火は毎年のお楽しみです。甘いスイカをほおばったあと宿舎へ。ベッドに入る前に、お友達とおしゃべりしたり、はしゃいだりするのが忘れられない思い出になります。



ファミリーキャンプ



花の日

二日目の昼食は炎天下、バーベキューの網を囲んでワイルドに食べました。キャンプは、参加者が日頃はできない交わりを深め、神様が子どもの霊性を成長させて下さる、大切な行事です。

⑥《敬老の日の施設訪問》たいいてい毎年、敬老の日に近い9月の日曜日の午後、近くにある老人ホームを訪ねます。40名くらいのお年寄りが、車椅子に乗ってホールに集まってくれます。子どもさんびかを合唱し、ゲームを楽しんで、最後に子どもたちがお年寄りと握手しながら、一人ひとりに花を手渡します。皆さんが笑顔で、中には孫を思ふのか目を潤ませながら、花を受け取ってくれる方もいます。

⑦《CSクリスマス祝会》昨年のクリスマスでは、一人ひとりが役を演じる降誕劇をしました。幼稚科の子どもたちが一所懸命にセリフを覚え、中高科は舞台道具の作成やリコーダの合奏。劇の中心になる小学生たちは賛美に演技にと、とてもたくさん頑張りました。

みんなで力を合わせて演じる劇を、お友達やお家の方、教



施設慰問



ファミリーキャンプ



会員の方々に喜んで観てもらえたのは嬉しいことでした。演じる生徒も観る人も「イエス様がこの世に来て下さったこと」の意味をしっかりと、そして自然に受けとめられたと思います。

### ●長尾チャペル子どもクラス

教会から車で約15分、市内の長尾谷町に3年前、建物が与えられました。このチャペルでは、地域への伝道として、牧師による月1回の聖書クラスや、婦人会による手芸・料理教室などを開いています。ここでの働きの一環として、毎月1回、土曜日の午前中に子どもクラスを開いています。

通常月の集会は賛美やメッセージを中心にしますが、夏休み（かき氷）や、イースター、クリスマスには特別なプログラムを実施しています。

集会が近づくと、下校する子どもたちにピラを配ります。たいいてい喜んで受け取ってくれ、その中から、本校とはまた違う気質の子どもたちが、集会にやってきました。

3年前の開校当初には、もの珍しさから近隣の子どもたち数十人が押しかけてきて、椅子が足りないほどでした。現在



クリスマス

は、常連になってきた10〜15名の生徒たちが集う、少しずつ落ち着いた集会になってきました。

### ●今後の課題

#### 1. CS教師の確保

教師の奉仕がCSだけでなく、別の教会奉仕と競合することがあり、分級のスタッフがい足りない時があります。

#### 2. 生徒の魂や生活への関与

小学から中学に上がるとき、クラブ活動への参加などで日曜日の集会に来づらくなります。イエスさまの近くで生活する習慣を身につけられるように指導します。決心を勧めるタイミングも神様に教えてもらうことです。

#### 3. 地域の子どもたちに

本校には平常、教会員の子どもたちしか来ていません。もし新しい子どもたちが来ても、受け入れられるよう備えること。長尾クラスはその訓練の場でもあります。



長尾子どもクラス

（柳瀬充代・川上 博）

## — お わ り に —

『牧羊者』二〇一二年度第IV巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。今回の教師養成講座は、長田栄一師に「聖書の歴史的背景」を書いていただきました。「牧羊ひろば」は、枚方希望教会のCSを紹介していただきました。今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。



## 『牧羊者』のご購読・ご利用について

\*分級用に、ワークA（幼稚園向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各630円（税込）でお送りします。

教会学校局ホームページ  
<http://cs.jccj.info/>

\*ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務所）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。

神戸市兵庫区塚本通3-3-19  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-6611

聖書講解 研究資料	福井文彦師 宮澤清志師 中島啓一師	高橋頼男師 金井由嗣師 小平徳行師
メッセージ例	松浦みち子師 飯田勝彦師	水野晶子師 和田治師
ワーク(A)	吉田美穂師 野勢かほる師	小菅央子師 竹崎光則師
(B)	田中裕明師	上森恭子師
(C)	石田高保師 田中愛子師	後藤健一師 小野淳子師
中高科へのヒント	松浦あん姉 丹羽遥姉	青木みぎわ姉 丹羽遥姉
子ども聖書日課	田中愛子師	勝田幸恵師
フラッシュカード	長尾秀紀師	加藤清師
イラスト	長尾明美師	山田和幸師
ワークプロ打ち込み	長尾秀紀師	長尾明美師
校正	長尾秀紀師	長尾明美師

また、発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（長尾秀紀）

## 聖書教育教案誌 牧羊者

### 二〇一二年度 IV巻

二〇一三年一月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団  
企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局

神戸市兵庫区塚本通三-三-一九  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-6611

印刷所 菱三印刷株式会社  
電話 (078) 576-1396

\*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み